本こいふ國では、見樣見眞似の藝當を遠來の珍客にむき出しに見せてゐる、珍客の眼にはごう寫つたであらうか、ごうもごちらも眞似は眞似だが如何にも不出來だこいふてゐるか……それこも……

も一度シユレーゲルに逢ふて見たいやうな氣がする。

（一五、一〇、一九）

土の人長塚節

小學、中學、大學こ判に押したやうな階段を登つた揚句、或は官海に入りて高等官一等從何位勳何等こなり、或は野に出でて、銀行會社の重役こなる、衣食足りて齡古稀を越ゆるこ云へば、誠に目出度候ひけるである。

學半にして遂に達せず、或は家貧に或は身るい弱に、天壽を全うせず、志未だ伸びずして空しく槽櫪の裡に命を終る、又悲しからずやである。

しかも未來に長へに生くる者は、必ずしも天壽を保ち王侯の富こ譽を持せる者にあらずして、却つて貧苦こ病弱に惠まれたる（？）者にその例を見る事が少くない。

昨秋海南山莊に病める時、床中子規全集に親しんだ。按ずるに、凡そ日本で明治、大正の御代に生れた程仕合な事はない、その中で又子規ほごの仕合せ者はない、俳句

に短歌に子規は永遠に生きる。子規は不幸短命なりといふ。何ぞ知らん子規の千古に生くべき眞價は、その病牀六年にわたる阿鼻叫喚の苦練によりて流露せられた作品である。早死して惜まるゝことはたしかであるが、生き過ぎたために惜まるゝことも世間その事例に乏しくない。

子規は三十六歳で死んだ。その子規が

下總の節はよき子これの子は
蟲食ひ栗をわれにくれし子

春ごとにたらの木の芽を送り來る
結城のたかしわれは忘れず

と歌ふたその愛弟子「土の人」長塚節は三十七歳で死んだ、節もまた明治四十三年東京朝日新聞に連載した小說「土」と、晩年一ケ年間にわたる療病歌「鍼の如く抄」によりて、正に長へた生くべき鄕土歌人である。

今春橋田東聲君春陽堂より「土の人長塚節」を上梓した。筆者は近く長塚節全集發刊の擧をまちわびてゐたが、今君の著書を手にし、一氣に讀過してほゞ長塚節の輪廓を我胸に畫く事が出來た。

下總國結城郡鬼怒川の畔を背景として鄕土藝術を叙した長塚節の長篇『土』を夏目漱石は評して

余は全く「土」に感心した、先づ何よりも先きにこれは到底余に書けるものでないと思つた。次に今の文壇で長塚君を除いたら、誰が書けるだらうと物色して見た。すると矢張り誰にも書けさうにないと云ふ結論に達した。

と贊嘆し、自分の娘が年頃になれば、必ず「土」を讀ませるつもりだとまで强調してゐる。

鬼怒川沿岸の農村を背景とし、そこに住む農民の生活を中心とし、季節の推移草木の凋落、氣象の變化、蟲魚の生死、年中行事等、あらゆる地方色が極めて忠實に描寫されてゐる「土」につき、著書は渾身の精根をつくしてある、その構想描寫淨寫の苦心より、その死期を促進した心血の努力に至りては、「宗教の本」として、ヒューマンドキュンメとして、「土」は長へに尊重されねばならぬ。

節の友人や弟子に送りし書簡、ここに病院より母にあてた農事や、雇人や、家事につきて認めた幾通かの書簡は、その眞劍味と熱心と根氣と几帳面な個性を遺憾なく表はしてゐる。本人が大正四年二月福岡の大學病院で危篤に陷つた時、父の手をとつて

お父さん私の樣な無學のものが、久保博士をはじめ助手の諸君や看護婦の人々にまで、肉親も及ばぬ程厚遇を蒙るのは、たゞ眞面目な仕事をして來た酬いです。人間は眞面目でなければ駄目です。眞面目に骨折るより外はありませぬ。

といつたと書されてある。

眞面目、骨折る、これが彼が一生を貫く生活信條である。その注意深い細心な恪勤な綿密な嚴肅と勤勉の結晶とも見るべき節の歌には、奇想縱横如何にもいはゆる長塚節その人の作品らしく思はれぬ大きい高い調がある。乘鞍が嶽または濃霧等の連作がその一例であつて、左千夫の主觀說に對し、客觀說を以て相對峙しながら、その調の高きは左千夫の九十九里濱の歌と相雁行してゐる感じがする。

此心持は節が左千夫に送つた

蒼空を天のほがらにいたゞきて
大き歌よまば生ける驗(しるし)あり

大空は空く遙けく限りなく
おほろかにして人に知れずけり

につくされてある。

節の歌作の中で尤も引きつけるものは、矢張り明治四十四年十一月三十三歳にして岡田博士から喉頭結核と診斷せられ、このまゝに打すておかば餘命一年を保つに過ぎざるべしと宣言せられて、

生も死も天のまにまにと平らけく
思ひたりしは常の時なりき

わが命惜しと悲しと云はまくを
恥ぢて思ひしは皆むかしなり

知らなくてありなんものを一夜ゆゑ
こころは今はきのふにも似ず

と歌ふてより、大正四年二月八日長逝に先だつ八日乃ち一月三十一日、久保博士に送つた「先生素湯を十分のめる樣に願ひます」といふ絶筆までの間、節がまだ〳〵小說も書きたい仕事もしたい、健康が許さばとか生命があればとか口癖にし、死に直面しつゝ、歌ふた二百三十二首の「鍼の如く抄」である。

筆者は齡既に五十を越え、幸ひになほ健康を保つてはゐながらも、餘命日に日に迫り、爲さんとする事日々に堆積しつゝ、ある身邊に省みて誠に感慨無量なるものがある。しかしものも考へやうである、吾々は只盾の半面のみを見てはならぬ。

學歷を終へ天壽を全うせるエライ人も、いつかはこの世を去らねばならぬ。しかしその人が逝ける時、大きな黑枠の廣告と、何行かの記事が新聞紙面を賑すだけで、そのまゝ光は消えて永劫に暗い。病のゆえを以て水戸中學を三年で退學した鬼怒川の畔の土の人は、三十七歳をもつてこの世を去つた。しかも未來に永遠に生きてゆく。

この書によれば、節は明治三十三年三月二十二歳にして子規を根岸庵に訪ひ、三十

五年九月には子規が死んでゐる、すなはち入門後僅かに二年有餘にして長へに相別れてる。相會ふこと何ぞ遲くして、相別るゝこゝの何ぞ速かなること記されてある。しかしこれも本居宣長が賀茂眞淵に松坂の旅の宿に、たゞの一度一夜を語りあかしたことや、平田篤胤の竟に宣長こ相知らざりしに比べたなれば、節が年に四、五回上京し一ケ月以上不忍池畔に滯在して、殆ご隔日位に根岸庵を訪ねたことは、宿緣誠に厚く深しこも見られる。

又乘鞍岳の傑作が一段九首の追込みに組まれたり、「鍼の如く」が、數ケ月にわたり「アラ、ギ」に連載せらるゝも、誰一人批評一つ書くものがなかつたのが、僧良寛の歌が近ごろ相馬御風氏によりて持てはやされたり、大隈言道の歌集が近く佐々木博士によつて始めて紹介せられた事を思へば、既に「アラ、ギ」に載せられた上、同じ大正の御代に傑作なりこ推賞せられ、德川初期の契沖こ相並んで近時その全集まで相前後して上梓せらるゝ運びになつてゐる。必ずしも悲觀すべきではない、節は正に地下に

瞑すべしである、否大に祝福して可なりである。

明治大正を通じ一億近くを算へる人間の中から、長へに生きてゆく長塚節、そこに彼の人格の閃きもあらう。そこに藝術の德もあらう。筆者は或意味から伊藤博文や原敬の横死を時を得たりこ考ふる如く、節の死も正岡子規や石川啄木の死の如く、見方によればその時を得たかの樣にも思はれる。

長塚節その人については、筆者は近く中村憲吉君の講演を聞いたくらいの程度で、知るこころ極めて淺い。僅に二百五十頁にすぎぬこいへごも、心忙しい功利的な理智的な世の中に、新に著されし「土の人長塚節」の眞價は、單に子規のいはゆる三十一字の俳句を繼承せる客觀的歌調そのものばかりではない。筆者は當分この書をポケットにして暇あるごこに田園詩人の作品につきしみ〴〵こ玩味して見たいこ思ふ。

（一五、二、二八）

叡山越

上京の途次京都府教育會に臨む爲め入洛する、一寸序でに叡山に登る、同行は山本藻川夫妻と母と妻と、それで一寸序でも凄まじいといふかも知れぬが、今は山の麓まで電車がある、麓から四明ヶ嶽の頂き近くまでケーブルがある、だから一寸序でに四明ヶ嶽に登れるのである、之れより半道ばかりにして根本中堂、更に琵琶湖畔坂本へは下り坂で、一寸序でに日吉神社へも御參りが出來る。時恰かも四月の十四日日吉神社の大祭にて、櫻ちりしく境内には太鼓の音とゞろに、幾千と數知れぬ群集に人波がゆらぐ、七社の神輿の渡御を拜觀するにまたなき折であつたが夜の講演がある、志賀の浦曲を大津へオウトをはしらせ、電車で再び京に入る、年寄や婦人を連れて叡山まで、豈それ一寸序でにあらずして何ぞや、此次に折があつたら、西塔の方をも見物し

て坂本の里で一夜をしづかに明かすことにしたい。

四明が嶽

四明が嶽のぼらひ見れば風をつよみあわたゞしかも白き雲黑き雲
四明が嶽のぼらひ見れば天はひらけ廣々しかも近江の海は
四明が嶽のぼらひ見ればこの尾根は逢坂山になだらにつゞけり
四明が嶽のぼらひ見ればうみ添に杉むらたてり園城寺ならし
四明が嶽のぼらひ見れば雲の上に伊吹大嶺のこがり穗かすめり
四明が嶽のぼらひ見れば大原のはざまに家のちらばれり見ゆ
四明が嶽のぼらひ見れば京の街賀茂川かけて片ぐもりせり
四明が嶽のぼらひ見れば巨掠の池光りきらにたゝへたり見ゆ

日吉神事

大比叡の山路おりくれば太鼓の音こゞろに聞ゆ坂本のあたり
くづれたる石道下り走り井の谷の小橋にしばしいこふも
拜殿の七社の神輿春の風に金色の櫻珞ゆれ止まずけり
氣負ひたる輿丁の群は七こころに太鼓こゞろかし鬨のこゑあぐも
樂につれて神女の舞ひ振り急こなれり御輿わたるこ人波ゆらぐ
さゞなみの志賀津の子らは氣負ひ立ちこころもせげにねりあるく見ゆ

酒の歌人物語

上、歌悦の機縁

新春、日比谷原頭第五十一議會開場ありて、吉例によりいはゆる選良となん稱する面々が、吠ゆる、わめく、彌次る、なぐる、その姦しい騒々しい一月二十一日の夕まぐれ、本郷西片町椎の木のほとり、竹柏園主佐佐木信綱博士の書齋に、火桶を圍みてしめやかに歌がたりに夜の更くるを知らぬ客がある、一人は直木燕洋、一人は筆者。

今から二十有五年前、手をとりてミューズの河を溯り、ナミュールの古都を訪ひ、デキナンの城址を弔し、グロット・ド・ハンの鐘乳洞に入り、スパーの溫泉に浴し、リエージの要塞に登りし旅の友直木燕洋。

歐洲の旅の空、いたるところ三日にあげず、洋傘とステッキの遺失忘失競爭に、筆者とたがひに聲名を擧げてゐた直木燕洋。

も一つ溯りて、虚子、碧梧桐、繞石、四方太の同人と、根岸の子規庵に足を運びし雑誌ホト、ギスの古顔の客將直木燕洋。

それでも分らなければ、前の大阪市都市計畫部長兼港灣部長、近くは内務省復興局長官たりし直木倫太郎博士。

昨年の暮、筆者は新聞の實生活を歌ふた作品をまとめて上梓し、『新聞に入りて』と題しこれを公けにした。その一本が燕洋君に贈られたが、世が世なれば復興局長官として、押しつまつた心忙しい年の暮に、マア贈つた小包の包紙は解きもしたらうが、セイ〳〵目次を一通り見たくらゐで、筐底に空しく埋もれるべき運命を持つてゐたのであらうが、、燕洋の文中にある如く、今や公職を退きて閑散の身となりし上に、舊部下より續出せる暗雲に取まかれて、極めて不愉快な冬籠の座右に出くはしたゝめ、一躍して君を歌悦に導く結緣の千萬無量の功德を見しことは、拙著の中に散らばりし短歌の光榮もさることながら、一度君の臍の緒切つてはじめて作りたりといふ歌を見

ては、そゞろに驚嘆を禁ずるに能はず、佐佐木先生と打合せの末が、この竹柏園の會合となつたのである。

こゝに君の歌、君の書翰を轉載するゆえんのものは、もとより君の歌の最初の試みそのものを紹介するにあると同時に、一つは直接間接に君を知れる公私の知人に、博士が現時の境地も披露して見たく、同時に歌悦といふことにふさはしき心強き實例の生み出たことを、歌に結緣ある人にも、またなき人にも、知つて貰ひ度いからである。

長たらしい前置よりも、こゝに、燕洋君が筆者にあてた一月十四日付の書翰を、披露する。

（前略）舊臘は新著『新聞に入りて』を御惠贈下され、早速御禮申上候べきを、彼是取紛れ遂に今日に相及び申候儀、一に御海容願ひ上候。御承知の通り、小生も舊秋漸く彼の面倒極まる復興局の仕事より逃げ出すを得候より、むしろひそかに大喜びにて、これぞ一世一代の夏休みと心得當分は保養がてらの旅行に、あくまで氣

樂振りを發揮致すべくと浮立ち申をり候折柄、はからずも舊部下より意外の大失態を生じ、何やらそのため、小生までも世間からは同じ疑雲に取卷かれたるかの感之あり、馬鹿臭き限りながら定に餘儀なきハメにて、人生の災厄はごこに潜めるとも得わかぬ次第、當分は謹慎して事態の判明するを待つに如かずと、折からの冬籠を覺悟致をり候場合、はからずも貴著に接するを得この上の喜びは候はず、非常の興味を以て拜讀措かざる次第に御座候。

しかして、同時に御書に敎へられて、小生もこの稀有の機會においてこそ、曾て思ひも及ばざりし和歌の道を踏み分け、雅兄のいはゆる『歌悅』に浸ることにより て、現下の馬鹿氣たる不愉快さから放たればやと頓に心の動くもの有之。いまだ如何にして歌を學ぶべきかをも辨へず候へ共、もしこの機において多少とも歌を理解し得ることゝ相成り候はゞ、貴著に本づくこの結緣の功德こそ、實に千萬無量なるべく候。

小生は第一に、貴著にある歌の歌言葉がわかり兼申候爲、早速『言海』を相手に、その研究から始めざるべからざる次第に御座候ひき。「玉ゆらの」とか「まなかひに」とか「くきやかに」とか、色々得も知らざりし古語に逢着して、一々『言海』と首つ引いたし申候。忌憚なくいへば

昔へにかへらむはよし歌心
歌言葉まで似せずもあらなむ

といつた風の疑問も起り申候。

次に早速『心の花』と『あらゝぎ』とを買ひ來つて一覽致し候處、いづれも〳〵萬葉ばりにて、ます〳〵『言海』との首つ引が大事な急務と相成り申候。その内に、古語の面白い點もぽつ〳〵わかりかけ候ものゝ、わざ〳〵「たつき」を「たごき」といつたり、「はやて」(暴風)を「はやち」といつたり、「臥す」を「こやす」とい

つたり、「しげみ」（繁み）を「しみゝ」といつたりするほどまで古語化せしむる譯が、まだわかりかねをり申候。

貴著一四一頁室戸崎の歌の「かしこきろ」は、これは『言海』でもなほわかりかね申候。「まなかひ」も『言海』では見當らず、『眼界』のことかとも空に想定いたし置候。「久にして」「ほのに匂へり」の「に」も、なほわかり兼ね居候。

貴著痢中吟の中に「サツデン・デス」もあれば「ごうせ死ぬと決ればいつそひと思ひに」もあり得ることを思へば、結局萬葉言葉で歌の品格を保ちつゝ、自由勝手なことを歌へばよいわけなのかとも想像いたし（中略）先づ手當り次第に日一日と歌の道へ近より申居り候。

茲に先づ小生が『言海』で知り得た全智識を利用して、小生としての最初の試みの和歌を御目にかけ申すべく候。

たばせつる書讀(ふみ)みにつつうつらうつら
　海南莊のあるじしのばゆ

いみじくもかゞよふ海の氣をうけて
　生(あ)れにし君ぞ歌のあかるさ

はしけやしやせこけ法師君にして
　北し南しいや生き生ける

生き生くる日毎に心たらへばぞ
　詠まるゝ歌のこゝだあかるき

たまきはるこの世のかぎりこゞしきに
　あかるき歌ぞ高鳴らすべき

歌日記くりひろぐればにし東
　吾もつらるゝ旅心地かな

海南のあかるき歌を讀みしより
　怪しうも歌に心よるかな

見聞くもの思ふものなべて君は歌の
　吾はうま酒のたごきこすらむか

歌の才我にあらずと思へれど
　うたにぞこめむわが眞心を

海南莊

往かへり武庫の山見は思ひよせむ

小松がなかの歌足らふ庭

ほぞの緒切つて以來の始めての仕事御笑草と存じ候が、同時に小生の切なる願ひを容れ、適當なる師につき歌の道に進むべき順序と方法とを、何卒この絶好の機會において適當にお授け下されたく祈上候。

如何の歌書を讀むべきか

如何の順序によるべきか

何の先生に、または方法にて教へらるべきか

實は小生多年俳句の方に興味を持ち居候ところ、今度東北に九州に、四國に旅行して痛切に感じ候ことは、俳句はとても旅日記の用には立ち申さず候。卽景卽目、みな句になり候ても、陳々相寄るの類にて、自慢らしき句は滅多に出來申さず、從つて九十日の旅行に、僅に十句しか會心の句はこれなく、これでは旅行そのものに

對して相濟まず候。蓋し十七字では、應用の範圍が餘りに窮屈のやうにて候。

自分の生活の記錄としての文藝の興味は、も少し自由なものがほしく候。しかく感じつゝありしところへ、あたかも貴著により、その東西南北の旅行に、悉く强き印象を錄せられたる記念の和歌を見て、如何にもこれだと、とみにうれしく覺え申候次第に候。旅行を樂しむこと最も多き小生にとりて和歌を知らざりしことが隨分損なやうな氣に相成申候。

最近小生の學友ども、鐵道協會にて俳句の稽古を始めたしとて、小生に先生を推薦せよと申をり候が、小生は右の理由によりて、俳句の代りに和歌をやるべしと力說いたし（中略）小生はその人達に、逸早く『新聞に入りて』をまづ見て、如何に和歌の自由な、氣樂な、あかるい、そして誰もの個性を發揮するによろしい、旅また旅の技術家に最もふさはしい感激と悅樂であるかを悟るがよろしいと、大いに宣傳、鼓吹しつゝあるところに御座候（下略）頓首

酒たらひ我がこひころぶ枕べに
神の子の來てつらなり舞ふも

燕洋君の歌心と歌言葉といふことには、異見ありといはんよりは、君にも誤解まりといふ方があたつてゐる。

近頃の歌が分らないといふ人が多いその人達の多くは、古い歌も實は分らぬ、百人一首の歌でごれだけ分るか問題である人もあるが、また中には萬葉言葉で面食らつて分らぬ人もある。現代語が這入るため調が可笑しい、否昔風でないため分らながる人もある。こゝに燕洋君と感を一にする人もありと思ふて、わざと省かずにのせて見た。

（拙著「新聞に入りて」中「ステッキよりシャツボへ」を參照ありたし）

歌悅については、昨秋大阪朝日の文藝講演會席上で、『歌と社會生活』と題して述べその大要は『心の花』二月號卷頭に掲載されてゐる。但し筆者は、碁も將棋も歌ガル

タもトランプも、皆それ〴〵特色を持つてゐるが如く、長歌も短歌も俳句も漢詩も、またそれ〴〵長所がある、殊に短歌と俳句において相似たりと論じてある。ただ理も非もなく短歌の畠へ引水せんとするものでない。たゞ人間といふものは、ソロバンや帳面ばかりに拘つてはをられぬ、物質界の外に思想界がある、現在の外に盡未來がある。法悦もよからうが、歌悦もいゝ。

下、酒人の歌

竹柏園の一夜は、佐佐木先生なり燕洋君の筆を煩はすがよい。たゞ君は先生の示すところに從ひ現代人の歌書六七册を手にし歌悦に浸りつゝ關西の旅程に上つた。

一月二十七日、神戸から君の第二信が來た。次の十八首が錄されてある。

佐々木信綱大人を訪うて

新しき我に生きむと思ふがに
つれられて來ぬ椎の
しづもれてあり得ぬ男我をもし
歌の心にみちびかすかな
生れるがに吾を遣すべき何もあらず
うれしからずや歌に入る日の
我命我がいとほしむ夕かな
まだ生き足らぬ心充てれば
五十年はむなに消にけりむなならぬ
日をこそ持ためこのよき日より

荒魂の五十年過ぎぬ和魂(にぎ)の
　　残れるひかり歌にぞ籠めむ

ながの旅の終りの日なりこの道の
　　はじめの日なり身内清めむ

天地のなごみ身に入(し)め新しく
　　もの見なほせばもの皆生き來

森の奥伏屋の冬をさみしくと
　　思はむものか歌に生きれば

今日はしもよき師に逢へりよき友の
　　よきつてありてよくもよき師に

醉つ拂ひの歌

酒なくて我あり得るも我なくて
　　酒あり得むや酒の神に問へ

遠つ世のうつけ法師がうつし世に
　　命かり來し我にかあらぬ

うまし酒わが飲むまゝにうまし歌
　　湧きくらむかと思ひつゝ飲む

身内あげてまめに生きたる我ながら
　　口内(くぬち)ばかりぞあまゆさすかな

歌よむと言ひ言ひ酒を飲みをれば

歌づらむより酒づらむかな

上手とも下手ともいはめ我歌は
我が活くるまゝの繪卷物なり

下手な歌を詠めりし日こそ下手な日を
くらせし日なりそれもまたよし

天地の大なるこころにわけ入りて
吾も歌はむを天地も聞け

酒の歌人として萬葉に大伴の旅人卿あり、德川氏に入りて大隈言道、橘曙覽など酒を歌へるも、明治大正に入りて吾れいまだ酒の歌人を知らず。

夙川のほとり、アラ、ギの歌人中村憲吉君酒を嗜めども未だ大に酒を歌はず、燕洋歌の玄關口に立てるまま、既に歌ふこころ皆酒なり、酒なくて我あり得るも我なくて酒あり得むやと歌ひ、むなに消えたる五十年遺すべき何もあらず、今や歌に入りて眼に見ゆるもの皆生き來たり、むなならぬよき日を持てりと喜ぶ。

かつて朝日の紙上に君が『酒を趁うて』の文を愛讀したりし人々は、大伴の旅人卿以來千載を經て、こゝに大正の酒の歌人直木燕洋を得しを、我と共に〳〵大杯をあげて喜ばんかな。

（一五、一、二九）

陶々亭の一夜

四月十九日東朝社の横丁の支那料理淘々亭に歌人の小集あり、會する者佐々木信綱石榑千亦、川田順、橋田東聲、前田夕暮、土岐善麿、北原白秋、吉植庄亮、折口信夫古泉千樫、齋藤茂吉の諸氏、歡談湧きて興趣つくるなく、十二人繪に歌によせ書に筆をぬたくらして夜の更くるを知らず、亡父自知居士の歌集を諸氏に呈して歌あり

歌の星の中にひそかに交じれれば
亡き父こひしこの春の夜を

歌よみし父いますころは吾よまず
こよひの歌を手向けてむ先づ

勞働農民黨結黨式の夜

上、式ありて宴なし

開期終りに近づき重要なる議案なほ山の如く積まれてあつても、黨爭の敵愾心に驅られて、決をとれば百票内外の相違あるにかゝはらず、異議あり異議ありと、子供ではあるまいし、一々堂々廻りをくり返して、議事の進行を害し政務を澁滯せしむるこゝにこれ專らなる我日本の帝國議會は、一面には梅田某が不都合である、松島遊廓事件はケシからぬ、田中大將の三百萬圓事件は言語同斷なりゝ、喧々がう〳〵互ひに己れが墓穴を掘るに日もなほ足らず、泥のなすり合ひに汲々としてゐる、その三月五日の午後、大阪土佐堀基督教青年會館では、勞働農民黨の結黨式が極めて平和に靜肅にとり行はれた。

たま〳〵同じ日の夕刻から東横堀の實業會館の一室で、勞働時間問題と農民と勞働組合問題を議し次で今次の萬國海員會議に列席すべき勞働側の楢崎代表、都竹顧問の送別の宴を張るべく、國際勞働協會の勞働條約委員會が開かれてゐた。

勞働時間問題に關する主任の草間君は東京を離れられず、農民問題に關する杉山君は結黨式のため手間取りて、四時が五時、六時になつてもまだ姿が見えぬ。

この間に終始座談を交換してゐた二十名近くの會員は、淺利君によりて勞働八時間制に關する打合はせを了した上、七時近く地下の食堂に入り、三皿の簡單なる洋食を終り、高野博士と楢崎都竹二君の間に送別の辭禮が交換される。

食終りて會議室に引返へさうといふたが、杉山君の一行はおくれても來るといふ、一きつと食事前だらうから、吾々は番茶を啜りながらも一行をこの席で待たうといふ、八時ごろであつたが、杉山、川村、荒谷、西尾、阪本の諸氏が見える、結黨式のあと

が警察側への説明などに手間どつて、やう〳〵のことに驅けつけたといふ。無論食事

前である、また三皿の西洋料理にフォークとナイフを動かす、一同豫定の行動をとり、卓を共にして番茶を啜つてゐる。

高野博士より生みの惱みを重ねた勞働農民黨の成立に對し祝盃を擧げる。大阪府立農業學校卒業後、和歌山縣の農業技手を振り出しに東北學院の牧師となり、大正十一年始めて農民組合を組織し、二三の農具の特許を得たり、農民運動のパンフレットを出したり、獨學で免狀を得た齒科の手術を組合員に無料で施してゐた日本農民組合長の杉山元次郎君は、新たに產れ出たる勞働農民黨の中央執行委員長としても、舊の如く溫厚恭謙の態度を以て、委員會に出席遲延のお詫から、海員代表へ送別の挨拶より、新黨の將來に倍舊の援助を求むる意味を、極めて靜かにしとやかに述べる。

勞働農民黨結黨式の一夜も、書きつけて見れば只これだけである。あまりに簡單である、あまりに明瞭である、日比谷ヶ原の大鳴物入りに比べてあまりに靜かである、ニュース・ヴァリューから見ればゼロである。しかしこのニュース・ヴァリューのゼ

ロであることが、つい筆をこらしむることゝなつた。

ヤレ建築落成式、ヤレ創業何週年記念、ヤレ何、ヤレ何と、一銀行會社、一學校工場の設立にも、大概は宴會とか記念品とかゞ付きものになる、冷酒、スルメ、壽司、辨當、繪葉書といふところが、どうかといへば簡單な方である。況や一黨の結黨式とある、今迄の紋切形でゆけば、鳴物入りの誇張された仰々しいプログラムがつゞくであらう、終つて帝國ホテルか上野の精養軒邊で祝宴を開く、賑々しき騷々しき大見えを切つた挨拶も連發されるであらう、それだけでは物足らぬとあつて、恒例により酒の上の喧嘩口論も餘興として出演されるであらう。

今少なしと雖も日本勞働總同盟、製陶同盟、日本農民組合、官業勞働、司しゆう同盟、組合總聯合、東京市電目治會の七團體、二十五萬人の組合員を抱擁せる新黨の誕生である。その結黨式を濟ませた幹部の一行は、ただ結黨式をすましたといふだけで國際勞働委員會の送別會に列して靜かに啜り靜かに語つてゐる。

靜なること林の如しといふのであらう、將士慘として驕らず陣營靜かなりといふのは、正に這般の光景であらう。これが結黨式當夜の幹部の動靜としては、餘りに靜かである、全く靜かである。お祭り氣分から全然脱却されて、終始抑損しつゝある一行の樣子を見ると何んとなく感傷的になり、夢のやうな心持もすれば、涙ぐましくもなる。

下、靜なる事林の如し

勞働農民黨も產まれ出るまでには、いひ知れぬ惱みがあつたであらう。しかもこれも西南の役前後から保安條例ごろまでの、血に彩られたる我國政黨の初期に比べたらそこに時勢の大なる推移を感ぜずにはをられぬ。今までの政黨は自由とか改進とか政友とか憲政とか、名はそれ〴〵に異なれども、實は歷史的沿革や地方的感情や、その黨の幹部の勢力爭ひなどによりて、幾多の波瀾曲折を見たのであつた。最近に生れた

武藤君の實業同志會が、幾分名前が實業階級を代表するが如く見ゆる外は、いづれも看板から見れば、縱に主義主張によりて分立されてあつた。

今度の新黨は明かに横に勞働農民階級を代表せるものであるだけに、吾々は先づ現時の憲政の上に、殊に普選實施前において、缺如され看過されたるこの種階級の代表的政黨が、こゝに認めらるゝに至りしを怪しまざるゝ共に、一國はあらゆる分子の綜合によりて成立する以上、新黨の成長するに伴ひ、自己の代表階級の利害こいふ外に我國我民族全體の同胞愛、人間愛につき理解を持ちて眞にその大をなすべく、絶えず留意して貰ひ度い。同時に膨脹は分裂を來し易い、勢力の增進こ共にこれにスポイルされ、これに驕り、こゝに忌むべき動機より離合集散する、また多數の黨員の中には從來共隨分不節制の事例なしこせぬ。勢力の增大こ共にその弊害を助長せぬやう深甚なる注意を要する。黨費は年額六十錢こいふ、その額の多少をいはぬ。ごうか黨員の自覺こ幹部の節制により、眞に理想選擧が行はれたら、それは一勞働農民黨の健全な

る發達のみではない、併せて既成政黨を根本より改造するここが出來る。今日頻發しつつある帝國議會の醜態も將來根こそぎにこれを取りのけるここが出來るといふものである。

今日の政黨こいひ議會こいひ、いかにも腐敗墮落を極めて苦々しい沙汰の限りであるが、これも盾の半面であつた、暗き一面には明るき一面もある。これを以て頭から一がいに排斥非難するここも出來ぬ、否一歩を進むれば、いはゆる議會の選良その者を選擧せる國民自體が自から責めねばならぬ。政治のあらゆる病源は端を選擧の腐敗に發する。普選によりて選擧區擴大せられ、選擧權者激增し、選擧期間縮小し、戸別訪問を廢し選擧費用を制限する。理論上廓清を期し得べきにかゝはらず、人或はその害毒現在に增すこも減ぜざるべしこいふ、若しその言の如しこせば、眞に我國の前途は暗黑である。

新黨は普選に際して理想選擧の實を擧ぐべく、重大にして且つ榮譽ある責を持つて

るる。同時に將來選擧區はます〳〵擴大せらるゝであらう、比例代表も行はれるであらう、必ずや小黨分立の傾向が助長せられるものと見ねばならぬ。大正十一年歐洲大陸を巡遊中、ポーランド、ドイツ、ベルギー、イタリー、フランスいたる處識者の憂へてゐた點は、小黨分立は國政の進行を阻害するといふことであつた。いづれの國もために內閣の更迭が餘りに頻繁である。その弊害から脫却してゐるのは、一年二回近くの內閣更迭を例としたイタリーが、反動としてムツソリーニにより今安定を得てる事である。しかしこれは一時の變形と見る外はない。この外には僅かに英國と北米合衆國あるのみである。

かく觀じ來たれば勞働農民黨たるもの、前途ます〳〵多難多事なりと覺悟せねばならぬ。この重大なるまた榮譽ある責任の衝に當れる杉山君はじめ幹部の人々は、林の如く靜かに一片のパン一杯の紅茶に枯腸を醫しつゝある。料理は一圓位だらうといへば、高野君はごうして二圓だといふ。暫く二圓說を肯定して、結黨式當夜のこの淸楚

なる靜かなる思ひ出深き小宴の心持を忘れねば、新黨は必ずや一歩は一歩と堅實にその地歩を進めてゆくものと思はれる。またさうあり度い。

大正十五年三月五日はからずも新黨結黨式を擧げた幹部の人々と卓を共にした。資本家側勞働者側及び吾々如き會員は、いづれもこのニュース●ヴアリユーなき平々凡凡たる會合にいひ知れぬ無量の感銘をうけつゝ、共に〳〵健實なる新黨の發育を心の底から祈つてゐたことであらう。

（昨年十一月パンルヴェの後をつぎ、八度目の首相の印綬を帶びし佛のブリアン氏の內閣總辭職の記事を見つゝ、一五、三、七）

歌行脚

長保寺より室生寺へ

大阪から和歌山へ十六里、今南海電車の特急は一時間半で走つてる。その昔は人力車で一日がかり、この代金六十錢なり、御中食は例の蛸茶屋でかれこれ一時間はお小休みといふところを、食堂車の中から淡輪(たんのわ)あたりの風光を賞しながら和歌山の市驛につく、紀勢鐵道に乘り代へて藤白、蕪阪(かぶら)の險もむかし語りとなり、下津驛に下車南龍公が要害の地として選ばれた御菩提所濱中の長保寺へ着いたのが、午を過ぐる一時ばかり、朝八時半六甲山腹海南莊をあとにし、足弱の妻を同伴して漸くに五時間そこそこである。

室生寺金堂内十二神將の中

たちばなの花はや落ちて御寺道
　蟬なく聲に汗ばみにけり　宏

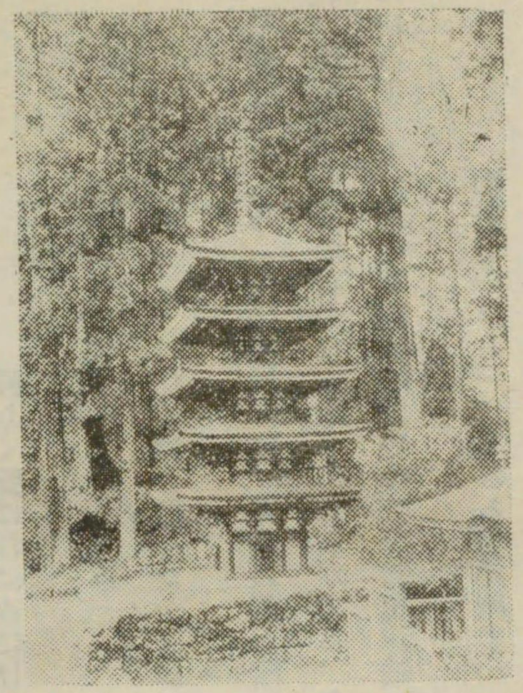
山門の老杉の下枝(しづえ)しげり多み
　仁王尊の像をなかばかくせり　宏

長保寺のうしろ一面の塋域には、青葉若葉が繁(し)み生へて、正面の階段を登れば、初代南龍院殿頼宣卿の有名なる無字の墓石がある、左にそれ又右に登れば、樹々の間俄に白みて、十五代の君樹徳院殿頼倫卿の新奥津城(おくつき)こうなづかれる。

御影石のきらゝにてれる奥津城(おくつき)の
　眞新しければ涙わきけり　宏

御墓に詣でて又元來し路を引かへし紀三井寺驛に下車、和歌の浦甲崎(かぶとざき)山上渡邊氏の

別邸皎月庵に入る、和歌山市の城東一帶から名草山、和歌の入江を正面に、玉津島より南龍神社、新和歌の浦かけて凡て指呼の内にある。



室生寺五重塔

戸明くれば入江一めん汐みちて

和歌の浦汐干の入江うねり〳〵
流るゝ水のはろ〳〵しかも　宏

長谷川知事をはじめ舊友と共に初夏の一夜をおくり、明くれば十三日五月雨のけむれる中を心のこして奈良にむかふ。

雨けむる中を舟のぼる見ゆ　宏

午一時といふに奈良の市公會堂に開催せる縣教育大會に臨み、現代の社會相につき講演する、終りて鈴木知事はじめ知人と詞かはす間も心忙はしく室生寺の旅にいそぐ。

三輪の里に下車、菖蒲葺ける軒並を縫うて二臺のオウトを驅り、ふりしきる五月雨をつきて初瀬にむかふ。一行は川田順、天野德、田中書記官、岸技師の四君と妻と六名。

三輪の町も海石榴市もすぎこもりくの
泊瀬を來れごなほ止まぬ雨　順

初瀬より名張路に入り、榛原を經て大野より左に折れ、室生川に沿ひ右に左に、溪谷を縫うて谷頓に深し。

名張路をオウト走れば道をせばみ

軒のあやめをすれて行きけり　宏

妻は順君と同じく竹栢園の古い〳〵門下生であるが、只古いといふだけで尻切りとんぼになつてる。順君は久し振りで奥さんお歌ひなさい〳〵、此旅でよまなければもう一生歌から捨てられますといふ。

この景色この旅にして歌よまずば
歌すてよといれ歌よみにけり

五月雨けむる新緑の溪流に沿ふて登れば一道の白雲が搖曳してる。

雪もやのこむる木の間にひとすぢの
炭燒く煙たちのぼる見ゆ

うち見れば炭燒のそばに人は居らね
煙しらじらこのぼりけるかな　順

巡禮がひとり下り來る杉群中
室生寺近しとおもほゆるなり　順

室生寺……眞言豐山派の別格本山、白鳳九年天武天皇御願により役の行者の草創にかゝり、後弘法大師飛錫して興隆のこと終り我身をば高野の山に留むとも心は室生に有明の月」といふ嬉しい歌を詠ぜられたといひ傳へられてる室生寺、弘仁期生粹の建築と彫刻及び幾多の工藝品を完全に傳來せる室生寺は、今更吾等が筆を待たぬ、只吾々が親しく岸技師の説明により、はからずも再び得がたき能い學問をしたことを心から喜ぶものである。こゝに川田順大人の歌それを引きたてるべく吾等の歌を交へて、室生寺案内記に代へる。

大杉の時じくおこす雨しづく　順
眞言秘密の山はふかしも

櫻の實つぶ〳〵黑き石の段に　宏
葉づたふ雨のおちやまぬかも

金堂

雨の中に金堂のかまへしづかなり　順
厚音檜皮の屋根ぬれて居り

これやこの鎌倉人の鑿のあと　順
因達羅大將の眉は高しも

手をあげて怒れるもあり手を腮に　宏
笑へるもあり十二の神將

南無藥師如來の前にこり〳〵の　宏
かたちしならぶ十二の神將

地藏尊こならびて立てる藏王權現　宏
小ぐらきなかにいや黑みたり

金堂の暗きが中に御佛の　德
御けしの金のほのにほふかも

並み立たすみ佛達のうしろを行き

あな暗しもよからだを摩るも　順

この古き曼陀羅の諸佛おぼろおぼろ
消なむとしつゝ光りにけるかも　順

金堂の壁の曼陀羅消なんとして
ほのかに光れり千の御佛　宏

金堂の暗きがひとり堪へがたし
もろもろの佛われを見たまふ　順

さとり得ぬ我をいとしと慈眼もて
ながめおはせりたふとき御佛

彌勒堂

ほのぼのとわが眼交にあり立たす
彌勒菩薩の御足を見たり　順

千年經たる御佛にわが燭をかざし
古りし木肌をなつかしみ見たり　宏

灌頂堂

時の間拜み足音ひそかにまかりまをす
如意輪觀音ねむりておはせり　順

たゞ暗し金胎兩部の曼陀羅の
おのづから明かる光のほかは　順

灌頂堂の裏縁にいづれば五重塔

杉の群生をそがひに立てり　宏

五重の塔

ふり深む夕雨の空に見上ぐらく

塔の九輪のなほさやかなれ　順

雨もやのうする中に少女子の

たてるが如き塔は立てりけり

歌よまんにはこの雨にこそと、川田君が無暗に興がるがまゝに、雨の方でもイ、氣になつていや降りしきる、奥の院はあすの朝にと薄暮の中をくだる。

山の湯槽にはいる、ドテラに着かへる、大僧正が心づくしのころゝ汁に腹をふくらせる、指導教授岸技師を中心に、古美術につき盛んにはたけ水練の質問を連發する、先づこれで即席早染弘仁式古美術練習所得業生の免狀を貰ふたつもりになつて、夜更くるまゝにやう〳〵床につく。

室生寺

ふり沈む雨霧の上にくろぐろと

群杉の秀のとがりゐる見ゆ　順

檐端なる黑杉の群さやかなれど

それより上は雲かきくらす　順

山寺の庫裡の浴槽の大きなるに

ひたりゐて聞く杉むらの雨を　順

護摩堂の石じきをたゝく軒の水
　こゞろこ鳴りて夜は更にけり　宏

誦經の鐘夢をさましつまここわれ
　室生のみ寺にねむりてありけり　宏

あかこきこ法師ら起きてひきあくる
　庫裡の大戸の底車鳴りつ　順

くはし花姫藤咲けりさみだれの
　ふりそゝぐ庭の石のはざまに　德

明くれば十四日雨なほ降りしきる中を奥の院に登る。

朝雨ふる奥の院の道のぼりゆけば
　杉の群生に駒鳥なくも　宏

足裏つく靴冷えこほれ雨水の
　流れてつたふ石の段を登る　順

雨の中をなづみ登れば奥の院の
　大師堂には僧も居らぬなり　順

室生寺をあこにもこ來し道に引かへす、途次大野寺に彌勒を彫りつけし巨巖を見る

雨もまたおもむきありこ行くなべに
　植女うつむける泥田を見たり　宏

向つ邊の巨巖の面のみほとけの
　見さだめかねつ雨の降らくに　順

雨のなかをわが歸りなばこの寺は
　また來る人もなくて暮れなむ　順

雨中長谷寺に詣でて寺坊に晝げをすまし、更にオウトをかりて朝倉の宮の故址のあたりを過ぎ、櫻井の驛より鐵路大阪に入る。

眞ひるにして長谷の御堂のこのしづけさ
　前山は見えず雨ぐも垂れたり　宏

泊瀨の朝倉の宮の址ごころ
　こゝこし思ふにはやも過ぎたり　順

郡山に講演の永田青嵐居士と、途上にて落合はんと約せしも果さず、大阪朝日の樓上に待てばやがて見ゆ。日いまだ暮れも果てざるに、一行うちつれてはやくも六甲海南莊の櫻上にあり、六月の半といふに雨しとゞに降りて寒ければ、サン・ルームの圍爐裏を開きてスキ燒鍋をつゝく。相會すべきはずの中村憲吉、岡本一平兩氏の見えざりしが心殘りなれど、口八丁の連中なり、俳談歌談縱横無碍夜の更くるを知らず。

明けそむる海南莊には岩の間のつつじの赤き、池の汀の杜若の紫なる、睡蓮の白きと點々相映じてる、ただそれだけで滿目萠黃に綠に濃く淡く皆青い、空を仰いで腕をかざしてるやうなアカシヤ、地に這ふて足を延ばしてるやうな萩、ゆふべの雨にぬれ映えし石、土、樹。その松林の中から蟬が時雨のやうに降つてくる、その相間〳〵にまだ藪鶯は蟬、と交響樂を奏してる。青嵐句あり。

大阪の煙をはなれ囀れり　（一五、六）

長州萩

上、指月城

大天井垂乳の岩を見まくすれど
足のふみごのさだまりかねつ（秋吉鍾乳洞）

峡いで、野は開けたりまさをく
もり上りたる指月山見ゆ（萩の街）

中國九ケ國にまたがつた百二十萬石の大々名毛利輝元は、防長二州三十六萬九千四百余石に削封されて、築城したばかりの藝州廣島を福島正則に引き渡し、周防山口の

白石に假寓し、更に新なる居城を選定せねばならぬことになつた。

時は慶長の八年冬とも、また明けて九年の春ともいふ。輝元の命をうけて山口から江戸へ上つた國老福原廣俊は、老中本多正信の邸にまかりいで

『さてこのたび輝元防長二州を下しおかれ有りがたき仕合せに存じまする、ついては居城として詮議を重ねましたるところ、三田尻の桑の山、山口の鴻の峰、萩の指月山、まずこの三ヶ所の内から存ぜられまするが、いづれに定めて然るべきか、一應御尊慮のほどおん洩し下されたく』

と來意の趣を披露におよんだ。

家康の懷刀とうたはれ、三百の諸侯を掌中にもてあそんでゐた正信は、しばし打案じてゐたが、やをら火桶にかざした手を膝にのせて、廣俊の前へグット仔細あり氣な顏をつきだした。

『桑の山、鴻の峰、指月山……いづれも要害の地なれども、海をめぐらせし指月こそ……』

といつた。なるほど中國の街道から十數里奥まりたる萩は、道中に相當手數がかゝるだけでも要害であつたらう。しかしさすがの正信もまさかに後年幕府が長州征伐をせねばならぬその時には遠すぎる事になるなどとは夢思はなかつた。もつとも長州征伐には長州ごころか防州の國境で、毛利軍に敬意を表し、そのまゝまはれ右前で退却したのだから、三田尻、山口、萩いづれであつても仔細はなかつた。

しかし正信の腹の底は、城の要害でもなんでもない、毛利は關ヶ原では西軍の旗頭となり、島津と相並んで西國外樣大名の筆頭であつた。その毛利の居城が中國街道にのさばり出られては、何かと事面倒である、名目は要害に有りだが、實はマア萩の奥へ御遠慮ありて然るべし、一寸した話が、江戸參勤交代に萩から中國街道へ出るだけでも、それだけ藩の出費がかさむといふものだ。

征韓の出師以來、廣島の築城、關ヶ原の出陣、大阪伏見の置邸、そこへ實收五十三

萬石余とはいへこの大削封、毛利に限らず當時諸大名を、財政の上から出來るだけ疲弊せしめたいのが幕府の大方針である。この位の分別は正信をまたずとも大凡の見當がつく。福原廣俊は正信の腹の底は見えすいてゐが仕方がない。イヤ誠に御尊慮御尤とあつて引さがつた。

指月の城は慶長九年三月修築の工事にとりかゝり、十三年六月にいたり落成を告げた。もつとも輝元は九年の十一月から萩にうつり常念寺に假寓してゐたといふ。萩へ引あげて足かけ五年のお寺住居、これも見方によれば、輝元が幕府への氣がねとも受けとれぬことはない。

ところが要害堅固であつたはずの指月の城が、一番危ないといふことになつた。三百年鎖國の夢をむさぼつてゐた日本は、外側は見ずに只内側ばかり見てゐた。井の底の蛙大海を知らなかつた、その大海の波は指月の城に打ちよせてゐたが、黑船が來て海の方から大砲の玉を飛ばすといふことは夢さら想像されなかつた。

かういふ時代になると、今迄一番要害堅固であつたはずの指月の城は一番危なくなつてくる。足元から鳥の立つやうに時は文久三年忠正公は居を山口に移してしまつた。同じことならモウ一足ふむ張つて三田尻まで出てゐたら、縣廳も山口とちがつて山陽沿線に顏をだす。さぞや便利なことであつたらうに惜しい事をしたものだ。

指月の古城は、今は滿目皆夏蜜柑畠になつて、黄なる實が青葉若葉の間に累々としてる。

入江を隔てゝ菊が濱の松原がつゞく、その東には砲臺の舊跡が殘つてる。更に東に眼を轉ずれば、松陰神社と越ケ濱の中間戎ケ鼻のあたりに、二股になつた古い煙瓦の不格好な煙突が見える。大砲製造でやかましかつた反射爐である。いづれも人心きよう〳〵、物情騷然たりし幕末當時の生々しい歴史を物語つてゐる。

今巨艦陸奥は舊砲臺前の入江に靜かに横はつてゐる。寅二郎、晉作、小五郎、狂介、俊介などの孫や曾孫にあたる小學校の生徒たちは、軍艦見物とあつて海上の浮城にむ

け小舟を急がせてる。

木下利玄の歌が思ひ出される。

軍艦の八幡ゆるがぬ胴中を
さゞなみうてり灣の靜けさ

近頃は四海波靜かなれば軍艦も
この浦に來てごんたくをせり

下、松下村塾

さゝやけきこの家の前にまこと我
立ちてし抱くつゝましきおもひ

ヤ狂介、オ俊介と槇垣のこの
かげにして手を握りしか

阿武川の中洲になつてゐる萩の街、そこに久坂玄端、高杉晉作、木戸孝允、山縣狂介などの舊宅が點在してゐる。

東萩に渡れば東の方毛利家累代の菩提所、四大夫十一烈士の墓處である東光寺を背にして、松陰神社、松下村塾、松陰幽居の家などが一廓をなしてる。

社前には松陰先生の使用せられた臺柄（だいから）と稱せらるゝ米つき臺が保存せられてある、安政五年六月二十八日、先生村塾より在京の久坂義助に贈りし書中に

隔日左傳八家會讀、勿論塾中常居七ッ過會讀終る、それより畠又は米春與在塾生同之、米春大得其妙、大抵兩三人と同じく上り、會讀しながら春之、史記など二十四五葉讀む間に米精（と）げをはるまた一快なり。

こある、松陰先生は二十三歳にして安積艮齋、佐久間象山に從ふて學び、次で安政元年二十四歳にして伊豆下田に米艦塔乘を計り、事破れて江戸の獄に下る、次で萩の野山獄にうつされ、後免されて杉家に錮せらる、幽囚中家學山鹿流兵學教授のため門人の引見を許され松下村塾を開く。

兵學研究に名を借りて門人等來りて學ぶ者多く、八疊敷の小舍狹隘を告げ、門人等鋸をこりこてを手にし、土石を運び地をならし、壁を塗り屋根をふき、十疊半の一室を建て增したこいふ、その村塾の前に倉庫がある。先生刻苦精勵寸陰を惜み行住座臥講話抄錄を絶えず、倉庫納むるこころ殆ご擧げて皆書册である。

芳洲の外藩通略、林子平の海國兵談はもこより、蘭人風說、接魯問答、黑魯嘆條約、坤輿圖識、八紘通誌、海外異傳、海島逸誌をはじめ、先生の著書は幽囚錄、回顧錄、幽室文稿、二十一回叢書をはじめ其短生涯間に於ける作品實に百二十余册に上つてゐる。

松陰先生老中間部詮勝要擊の事に座し、安政五年十二月投獄の命下り、翌六年七月江戸の獄に入り死罪に斷ぜらる。

親を思ふ心にまさる親心今日の
おこずれ何こ聞くらん

は十月二十日認めたる永訣の書に記されたる歌であり、

身はたこひ武藏の野邊に朽ちぬこも
とどめ置ましやまと魂

は獄死の前二日、十月二十六日留魂錄に記されたる辭世の歌ある。その留魂錄は四つ折のちり紙が六七枚、ガラス戸を隔てゝよく見えない、今日は何こかいふ人が居ないこいふので、ガラス戸はごうしても開けてくれぬ。

立ち去りかねるガラス戸の内、留魂錄とならんだ先生の抄錄の中に、松葉に木の子を添へし繪に

名月に香は珍しき木の子かな

と題したのが見える。先生が漢詩と短歌の外にかうした俳味にも惠まれてゐた事はいかにもうれしい。十八疊の松下村塾は安政三年七月より五年の十二月入獄まで、わづか二ケ年半しか開かれなかつたが、維新回天の大業を仕上げた志士

高杉晉作、久坂玄瑞、木戸孝允、前原一誠、野村靖、品川彌二郎、山田顯義、山縣有朋、伊藤博文、

などは皆この村塾から輩出した。

先生のあとに殘り明倫館舍長となり、奇兵隊長となり、內は俗論黨と戰ひ、外隣藩、幕府、外國を相手に砲彈と言論とにより析衝した門下生高杉晉作も二十九歳で相

果てた。昔ながらの槇垣に添ひ柿の木のもとをめぐり、村塾と幽囚の室のあたりを低回してゐると、空に聲がある。

「お前はもう何歳になる？」

「僕はモウ五十二歳、あと八歳で先生の壽命の倍になります」

「イヤ人間の働くのは二十歳越してからヂヤ、松陰先生は正味十年働いて亡くなられた、お前などは五十二から二十年差引きて三十二年、もう三倍以上の歳月をすごしてきたのだ、……たゞ無駄にナ」

空の聲がつゞく

「維新の志士は國禁をくゞり〳〵不完全極まる學問をなし、三十歳ならずして亡くなられたが、あれだけの仕事をした、今の連中は大手振つて完全な學問を修めてるやうだが、仕事は出來ずにたゞ年だけ食つてゆく樣ナ」

× × × ×

所？　時？　人？

明倫館のあとに建てられた小學校からは、今三々五々家路さして歸つて行く、完全な教育をうけつつある男の子も女の子も。

萩より別府へ途上

五月雨はしとどにふりてあまり水
棚田の畦をながれ越す見ゆ
道のべの水田の畦の柿青葉
おとせる影のややにゆれ居り

四番茶

一、伊豆めぐり

去年の夏は北海道樺太で三番茶を煎じた。今年の夏はどこで四番茶を煎じたものであらう？

この月はじめに高原蟹堂と長州萩に遊んだ、指月の城より江を隔てゝ反射爐を望んだときにフト伊豆の韮山を連想し、松下村塾をたづねた時に、松陰が米艦のあとを遂ふた下田の港に想到された。

小さい近い狹いしかも世間に知られ過ぎた伊豆の半島、源頼朝や豪僧文覺や法華の行者日連の流された伊豆、叔父の蒲冠者範頼と甥の御曹子頼家が非業の最後を遂げた

伊豆、伊勢新九郎長氏の風雲をまき上た伊豆、幕末には江川英龍や下田條約に名を賣れば、明治に入りては紅葉山人の金色夜叉でお宮貫一の夫婦せんべいや繪葉書まで賣り出した伊豆、大正の今日となりては夏向きに丹那トンネルの水藝で評判をとつてる伊豆、

山あり海ありいづれに足をとゞめても天然の溫泉は、旅塵を洗ふに足り、四季の旅行はとりぐ〳〵の趣ある伊豆、ありふれる場所だけに正直正銘のだしがら四番茶を伊豆半島に煎じて見る事にしやう。

二十三日沼津靜浦を振りだしに足がごちらに向いてゆくか、マア出かけて見ぬ事には分らない。

二、三島の宿の丑五郎

二十三日朝の特急は函領にむかつて走る、沼津につく、舞坂で開かれし靜岡朝日會をすませた石井睡蓮の一行と出遇ふ。

一行は先づ三島神社に參詣といふので自動車を三島に走らす途黃瀨川を横ぎる。

富士の白雪や朝日でとける、とけて流れて三島女郎衆の化粧の水

といふ歌で三島の名が賣れてるがそれはうそで、富士の白雪のとけて流れこむのはこの黃瀨川だといふ、さうなると三島女郎衆の手水、紅かね、化粧水、夜明けの醉ひざましではなくて、冷靜そのものの權化の如かりし賴朝も、承安四年であつたか富士川に維盛を敗つた往き道であつたか歸り途であつたか、陸奥からかけつけた義經の手を握りて、今頭殿（父左馬頭義朝）の顏を見るが如しと、さすがにうれし涙に暮れたといふ、その涙のほろ〳〵流れこんだ川といふ事になる。

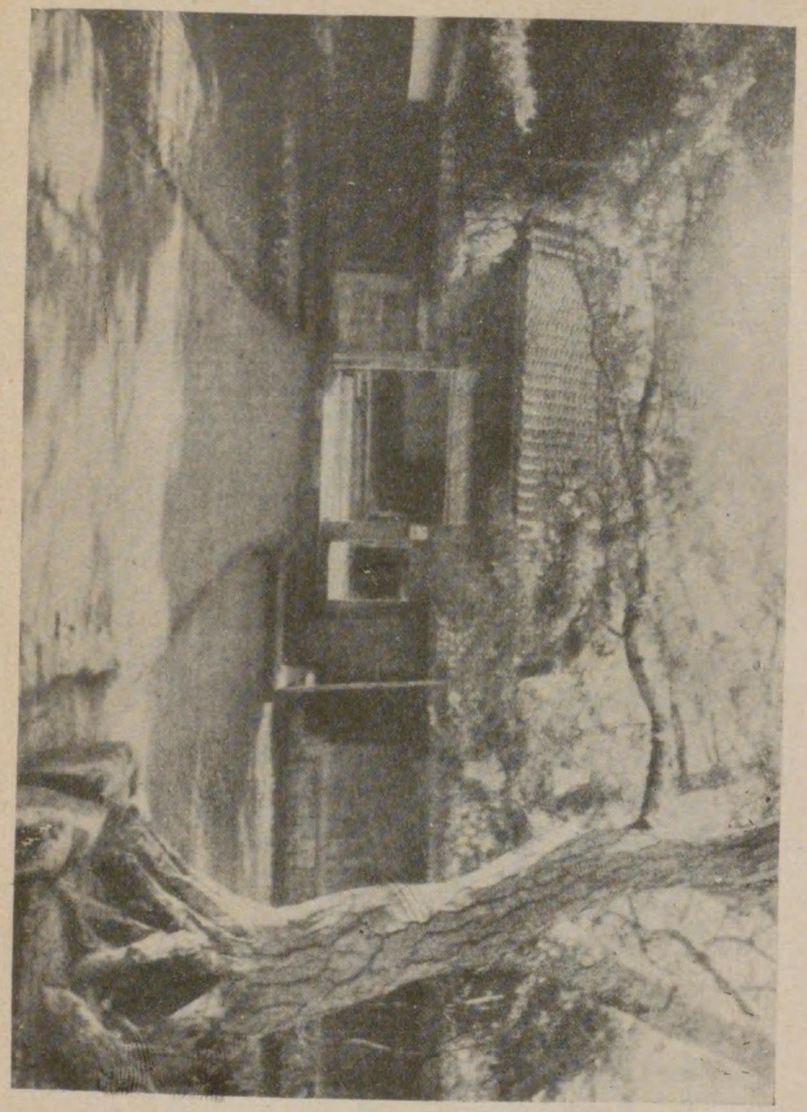
町の有志に迎へられて三島神社に參詣する、左に折れて二町許り岸を浸せる清流に沿へば水上にでる、更に左折して元は小松宮今は李王殿下の御用邸内に有名なる小濱の池がある、すぐ熊本の水前寺が連想される。夏猶寒き清れつなる泉はこん〳〵とし

てあふれてる、水郷の町三島を流れる清泉は、これでは富士の白雪がとけて地下をくゞつて來たのらしい。この邊のところは專門の方へ然るべく讓ることにする。

三島の宿といへば神崎與五郎則休東下り堪忍ぶくろの一席で耳についてゐる宿場である。ところが石黑況齋翁のもうろくといふ本によると、馬食ひの丑五郎とあるは國助の誤であり、馬に乘つて吳れといふのがいひがかりになつてゐるが、實は駄馬の乘り繼ぎをするときに荷物に足がかゝつて損じる、そこで國助があづかりものに土足をかけて損じた、三ピンごうするのだとケツをまくつたのだといふ事である。

お芝居や講釋では馬に乘れ乘らぬといふ方が話の足取りが面白い、名前も國助では義僕とでもいひたくなる、丑五郎で至極結構であるが、ごうしても結構と參りかぬるのは肝心の神崎與五郎則休は大高源吾忠雄の誤りとある。

もとより神崎與五郎が源吾の氏名を詐稱したわけでない、後世何者かゞ知つてか知



門正館門衞左館木川江

ずにか與五郎にしてしまつたのだ、そこで取敢へず案ずるに義士銘々傳は大高源吾はさゝ賣りでモウ一役割りふられてある。成るべく一人一役に願ひたい、サテたれに割り當てやう？　忠臣藏七段目の間（はざま）や竹森や武林では分別が無さすぎる、コリヤ神崎君に願はうといふやうな、作者の筆の先の氣紛れかも知れぬ、下戸の赤垣源藏が醉ひタンボの源藏になるのだから、この位のお筆先きは少しも珍しい事ではないぞよ。

何にしてもお筆先きはおそろしい、高師直翁や梶原景時老などは實惡の一手專賣にされて仕舞つてるが、又神崎君の如く好ひくじを引あてたのもある、三島ではアリヤ大高だイヤ矢張り神崎だイヤ大石瀨左衞門だといふ人もある、ソウなると之もまた專門家へお渡しする外がない。

源吾のわび證文が因緣となつて江戸で講釋師が修業を積み、いよ〳〵一枚看板となるには、まず中仙道を京に上り東海道を引返す、三島の本陣世古六太夫の宅で、義士銘々傳の長講一席を辯じ上る、世古の印を旅日記に押してもらひ、江戸へかへつて仲

間一同に被露する段取になつてゐたといふ。

東海道五十三次昔の面影は次第々々にうすれてゆく、數多い本陣の中から專門家が今の中に二三考古の史跡たるべきものを指定して保存をして置きたいものだ、それにはこの三島なぞが宿場としても本陣としても候補地として推薦したい。

しかし推薦して見ても肝心の世古の家は牛臥に引越して本陣はあとかたもない、樋口といふ本陣もあつたが、これも僅に庭だけ殘つてるといふ、ごうだらう街道筋で今猶面影を殘してゐる本陣があるだらうかといへば、サアまあ元箱根位だらうといふ、今自動車はその元箱根の峠を左に仰いで韮山にむけ走つてゆく。（七、二三）

三、江川太郎左衞門館

天正小田原の役は秀吉にとりては雌雄を決するとか勝敗を爭ふとかそんな緊張した心持よりも、大觀兵式擧行位の遊戯氣分でたゞ一にらみににらみつぶしてしまうといふ意氣組であつた。

果して八州の城塞は風を望んで降つたが、その中でたゞ一つ韮山の城が陷ちない、韮山は伊勢新九郎長氏が堀越御所を破りて居城せる北條家由緒の地であり、驍勇をもつて名ありし美濃守氏規これに立てこもり、織田信雄、福島正則、蜂須賀至鎭、牛駒親正等、五萬の兵を以て陷ることが出來ぬ。氏政からも小田原入城をすゝめる、家康からも開城をすゝめる、氏規は

我壘に對して彈丸を發す、城を致すは本意に非ず、願くは城を德川殿に致さん。

といふ、秀吉その志を壯としてこれを許し、氏規は城を出て秀吉に成を議すことある。

この名譽の歷史を持つ韮山城は、水鄕三島を後に丹那の盆地を左に見て、下田街道を南に北條の村に入るところ、左に近くそれと見られる。

右の小山のふもとには古河と相並びし堀越の御所跡がある。左韮山城のふもとには賴朝の流された蛭ケ小島の碑が早苗田の中に立つてゐる。

城山について回れば破風作りのかやぶきの大きな建物が眼につく、有名な江川太郎左衛門累代の住宅である。江川の館は鎭守府將軍左馬權頭源滿仲次男宇都賴親より九代親信、保元年中伊豆八牧江川の庄に移りし時の建築にかゝり、間口十三間奥行十間棟高五間五尺面積百五十三坪にわたる、生育せる材木をそのまゝに利用せる生柱と、日蓮上人自筆の防火妙符の棟札とが珍しいものになつてゐる。

韮山の圍によく兵火に燒かれなかつたものだと不思議に思ふたが、江川家所藏の記錄を借りて見るに、二十七代江川英吉は氏規の下に韮山城を固守し、その子二十八代英長は家康に屬してゐたが、秀吉開城の事を家康に囑せる時、家康は江川の家作は保元以來の舊宅なるをもつて、これを毀たざるを條件とし開城の事成れりとある。

江川家の裏門は北面して城に隣つてあるが、その門扉には尙銃痕刀矢の痕を遺して居る、俗に富士見十三ケ國の内で口伊豆の眺めを第一とし、口伊豆の眺めにこの江川邸の裏門を第一とすといふ、つまり江川の裏門が日本一富士見の名所となるわけだが、

これは割引してかゝらねばならない。しかし何故こんなうわさが立つたかと思ふと、矢張り江川家の記錄の中に

松平定信侯海防のため豆州沿岸巡視の時當地に來り、裏門より富士を遠望して其絶景を稱し、隨行の谷文晁をして之を寫さしめ、文晁に寫山樓の號を賜ふ

とある。いづれにしても私人の邸宅としてかくまで長く保存されてゐるものは例が少ない。明暦の年江戸本丸造營の時、當家作の往古より一度も火災にかゝらず珍しいとて、その家具上納の命あり、三十代英利より棟木一本を獻じたりとある。日蓮上人の防火の護符の寫しは、いまだに遠近の信者におくられてゐる。

保元から大正十五年まで江川の館はまさしく七百七十一年。

四、肩へ筒前へ進め

江川の館の正門を出づれば賴朝の爲めに惚れた政子はさらはれ、自分の首までこら

れた平兼隆が山木のこりでの跡が見える。

正門の前には江川英龍、英敏現當主英武三代にわたり、洋式の兵事教練を農民に施した、思ひ出深き廣場がある。

士農工商の別を廢し國民皆兵の制を立た事は、廢藩置縣と相並んで維新の二大革新があつたが、幕末一韮山の代官江川英龍が當路に農兵の制を說き、遂に自らこれを管内に決行した事は誠に驚異に價する。江川家の記錄を見るに、

坦庵の師高島秋帆は練兵の際和蘭語をもつて號令せしも、坦庵はこれを國語に譯せり、「肩へ筒」「前へ進め」等の如し、大正の今日尙これを用ゆ。

とある。この廣場で「肩へ筒」「前へ進め」の號令に、例の韮山笠の農兵の足踏の音が、國民の長夜の眠りをさましつゝあつたのだ。

三島の舊家で三等郵便局長中故參中のその又元老として、筆者親讓りの友たる渡邊壽太郎老に迎へられて、車中この農兵の事を話したら、三島に布かれたる左の農兵規約書をこりよせてくれた。如何にも珍しい、左に錄して農兵そのものと、當時の民情をしのぶよすがとする。

宿内防禦筋議定

方今上方筋の大事件下として奉恐入候得ども、上は諸侯太夫にも軍務に無御暇御支配(韮山代官の)においても同じく御多端の折柄、窺隙惡徒不懶の族往々爲群、不憚上恣に横行眼前の樣に被存候、斯る時勢を三百年來の昇平に比し、銘々家務のみ心を委居るも、所謂前門の虎を知後門の狼を如不知、不時の災害難斗、當今は嚴然たる威氣を表に顯し、專ら外邪を防ぎ、内を和し候計肝要の時節に候、仍之拙者共一同計議を遂げ、宿内自衞の銃隊を備候外他事有間敷決評致候、依ては宿内重立候有志の人に炮術傳習致度、尤も今般は銘々自己の守衞他事に不拘、只々自衞のため一致に和し親疎の無隔、父子兄弟のため相互に助合守衞專要に可致候、且東西の御軍勢御出張有之節は、外亂妨之憂も有間敷こいへども、窺虛浮浪蠻徒の類、非人乞食な

ごの爲黨、妄に婦女を劫掠し財器を奪候樣之儀有之候ては、假令百姓の身にても男子の甲斐無之、及丈防禦之術致候はゞ、上は國家御爲下は各々安堵に產業を營む勸農理財の基本にも有之義、能々辨別御會得の人に、拙者共一同姓名御しるし、會日無欠席稽古可被致候、尤人數相定候上は、宿內長百姓ゟ稱し、長小の階級を相定、小前の者無禮の儀無之樣、別紙條々相定差出候間、右承知の人には姓名御記し印形可被成候、盟會は追て日を定御案內可申上候以上。

慶應四辰年正月

規定

一、三役人の內炮術稽古致さざるものは、畢竟宿內の憂患を深く痛心不致故之義にて外守衞筋憤發致候もの、妨げにも相成候儀に付、宿內一統小前同樣相心得可申事、但其當人より退役相願候樣同勤より可申談事。

一、銃隊に組込候衆人人撰の義違背致候ものは、假令高持身元たりゟも、小前へ引下げ、祝儀無祝儀ゟも上下袴不相成事。

一、高持身元にても後家或ひは極老にて難勤者は、追て相續人出來候まで代人可差出事

但本文の外小前末々銃隊へ不組込ものは、追て竹槍取立連印可致置候事

一、去る子年御取立相成候農會の內、小前のものも有之候へごも、自今相改永々長百姓へ組込可申事

一、小前の者長百姓へ對し無禮有之は役人共より嚴重可申付候事

一、萬一事變發起の節は、役人共より合圖次第速に屯所へ相集可申、且又其時宜により小前の者へ相當の課役可申付事

但銃隊人數へ不組込ものゟいへごも、銘々宅に居候ては不都合に付、一所に屯致居、或は手分けに宿口々見廻等可致、其折柄手弁ゟ申すにも成間敷、何れ焚出等も可致、右體の節身元の方より米其外其分限に應じ無違背可差出事

一、銘々炮術稽古の義は、月々二七の日相定、屯所へ出張可致、萬一私用病氣等僞り不勤之者は、爲過料合藥料の內で金一分宛急度差出申事

但役人の內御用他出又は當番の外は本文の通りたるべき事

右者今般宿內一統篤と衆議の上前條取極候上は、長小の百姓急度階級相定、別紙口達書の趣厚弁別致し、眞實の守衛相立候樣一同憤發いたし、小銃取扱其外心得方の義は、兼て去る子年被仰渡之通相心得可申候以上。

慶應四辰年正月

宿の本陣樋口傳左衞門世古六之助はじめ約三百人の名前が、それ〴〵自署捺印されてある。

銃隊の人選に背違せるものは、身分高くとも小前に引下げ、祝儀無祝儀共上下袴相成らざる事などは、如何にも面白いが、名前が既に宿內防禦筋儀定であり、一寸見るとこの間の大震火災の自警團のやうだが、あの前書の四方八方へあたり障りのないやうに氣を配つたいひまはしを見ると、なか〳〵近頃の外交文書もそこのけである。

多言を要しない維新大政奉還の時、全國の代官が京都へ召し集められたが、他の代官はいづれも五日十日とたゝぬ內にかへされたが、韮山の代官だけは約半歲であつたか一年であつたかそのまゝ留めおかれたといふ。

それは實に箱根の險とこの農兵とのためであつたといふ。

五、韮山の反射爐

九段の靖國神社々前の銅像は大村兵部大輔であることは、だれも先刻承知の事である。しかしあの銅像の礎石を圍んでゐる數門の砲が、伊豆韮山で坦庵江川太郎左衞門英龍の鑄造した、尊い幕末の記念物なりと知る人は多くはないと思ふ、勤王は攘夷と手を組み、佐幕は開國と足並そろへて居たやうなものゝ、三百の大小名その中には、それぞれ勤王と佐幕と互にしのぎを削り、京都も江戸もそこには攘夷に開國に、群議

鼎を沸かして居たのである。

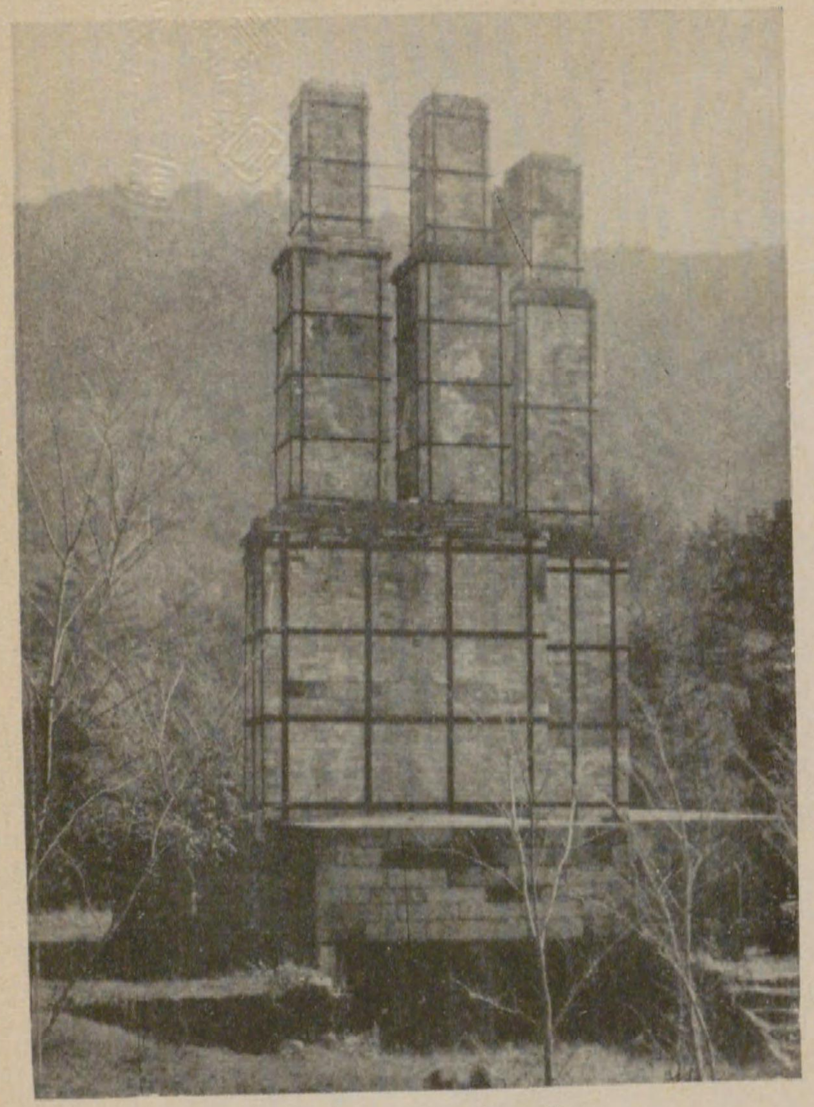
先覺の士江川坦庵は高島四郎太夫秋帆を師とし、眼を海外に開きてより、農兵に砲術に築城に製艦に、時局の對策に、奉公の誠を致して居たが、常に鎖國攘夷の保守派のためせいいちゆうせられ係累せられ、特に海防視察のため、豆相房總および大島を巡視した時は、監察鳥居耀藏と事々物々衝突して、坦庵は遂に韮山に籠居して居た事もある。坦庵の

里はまだ夜深し富士の朝日かげ

といふ句は例の裏門から富士を見た即興だと傳へられてあるが、これは同じ坦庵の

里はまだ明けぬに富士の初日の出

といふ句と同じく、當時開國進取を唱へた先覺の士坦庵が胸中のうつ懷を漏らしたものであつて、かの井伊大老が



韮山反射爐

春あさみ野中の清水氷凍て
そこの心をくむ人ぞなき

の歌こまさに異曲同巧と見るべきである。

黒船が見えだしてから海防といふ事が八かましくなる天保以來蘭學者はもちろん、識者はあげてねらい所が大砲にあつまつた。今までこても大砲らしいものは無いではないが、それは銅や青銅の鑄造ものであつて、鋼鐵の鑄ものはまだ手におへなかつた、江川英龍が幕府の力で火砲を鑄造すべく建議したのは嘉永六年と記されてある、當時英龍は小反射爐はつくつて見たが、鋼鐵の溶解が思ふやうに行かない、手代を佐賀にやつて鍋島閑叟侯の着手せる反射爐を視察せしめたこある、當時反射爐の試作に手つをけてゐたのは、佐賀の外水戸の德川齊昭、鹿兒島の島津齊彬兩公であつたらしい。長州萩の反射爐は、恐らく韮山によりて學びたるものでは無からうか、まだ建碑式は

行はれないが、反射爐碑の原稿を見るに、江川式の兵學につく者幕府列藩數千人を下らず、その門に入りし名士としては

佐久間修理、橋本左内、木戸孝允、井上馨、黑田淸隆、大山巖、杉孫七郎、大鳥圭介

などの名が見えてる。

幕府の俊豪川路左衞門尉聖謨は周易の師を佐藤一齋に求めたら、一齋は門人佐久間象山を推薦して彼は自分よりも精通してるはずだといふた、象山より周易を學んだ聖謨は、又象山に洋學を進めて江川の門に紹介したとある、松下村塾の下に記せる如く、松陰は又敎を象山にうけてゐる、その松陰の門下生木戸孝允が井上、杉などを引きつれて、恐らく象山の口入で韮山に學んだのではあるまいか。

韮山在の中村へ次で鳴瀧に移されし二基の反射爐は、安政元年起工翌二年に完成したと傳へられてゐる、反射爐の苦心の存するところは火焰を反射せしむる爐床の構造

と、その高度の熱に耐ゆる煉瓦の製作とである、坦庵はこの煉瓦の原料には長らく苦心して最後に天城山下梨本の粘土を得、よく千七百度の熱に耐へたと傳へられてゐる、當初この反射爐を賀茂郡本郷村に設けたのは、交通の利とこの粘土採取の便を考へたのであらうが、下田に近きを懸念して、更にこの韮山に移されたのである。

反射爐は高さが五丈八尺基方一丈八尺、二基互に直角をなしてゐる、當時まだセメントなるものが分らない、粘土と石炭をもつてしたが、それだけでは崩壞の憂ひがあるので全部しうろなはを以てまきつけ、これにしつくいを施したゝめ、昔は煉瓦は外から見えなかつたさうである、ところが風雨にさらされてしつくいは段々はげる、煉瓦も崩れだす、全部蔦かづらに卷きつかれ小松が生えて居たといふ、時の寺内陸相石黑子の進言を容れて原形の保存を命じ、蔦かづらはとり去る、鋼鐵のワクをはめる、今はところ〴〵にしつくいの壁、しゆろなはを卷きつけたあとの溝が見えて、煙筒の方に流用されたる、殘物の梨本の耐火煉瓦も點々殘つてゐる。

（追記）反射爐研究のため手代を佐賀鍋島公の下に遣はしたさいふ記錄もあるが、坦庵はしば〳〵長崎にゆき親しく蘭人につきて研究せんとし許されず、安政元年四月手代柏木忠俊、家來望月大象、矢田部卿雲を遣し、蘭船スームビンフ艦長スハーヒウスにつき主としてガラナード破裂彈およびボイスを研究せしめたが、ごうしても國禁の故を以て敎へてくれぬ。坦庵は復命を聞きて發憤日夜研究の結果遂に破裂彈をつくつたとある柏木の、一行序でに佐賀へ立よつたか、立ちよらなかつたか分らぬ。

六、品川砲臺

坦庵は嘉永六年八月品川砲臺築造の工事を督し又小形洋船三隻をつくつた、安政元年反射爐の築造にかゝつてゐる時、砲臺完工の故をもつて賞せられ、次で翌安政二年江戸に召さる、寒疾を推して東上し五十五歳をもつて長逝した。

元治元年幕府韮山の反射爐を廢し東京小石川關口に設けんとし、後王子瀧野川に移す、後更に小石川水戸藩邸に再轉し今日の砲兵工廠となつた、其砲兵工廠は日清、日露の戰役を通じて偉大の功績をあげたが、大正十二年の大震災に燒かれ、今や新たに中國九州各地に分設せらるゝことゝなつてゐる。又品川の第三および第六の砲臺は史跡名勝記念物と指定されて、舊陣屋を修理し火藥庫玉置場等を改築し、東京市公園課は更に水道電燈等の設備を施して、海上公園となすの議が熟して來た。時は矢の如く流れてゆく、今やフランスのカレイではイギリス海峽を超えて、ロンドンに打ち込む砲臺が築造されつゝあるといふ、相模灘から大砲の彈が東京に落ちるには間もあるまい、品川砲臺の海上公園も面白い、坦庵も地下で聞いて驚きもしやう、又その梨本產以上の耐火煉瓦がまだ出來ぬと聞けば、ほくそ笑みもしやう。イヤ歎くかも知れぬ。

江川家は代官である、しかも武相駿豆にまたがり管內の祿高は十萬石に上つて居たゞらう、多田滿仲の子孫として連綿三十八代におよんで居る。家臣には柏木忠俊望月大象等の名士を出だし、今猶名門として重きをなしてゐるが、一士族たるに過ぎない。

もし勤王佐幕の向背を口にすれば、舊大名華族の總てを何んと見る。まして自負心のもつとも強かつた象山にして、我に過ぐるもの佐藤一齋の智江川坦庵の膽と許したる江川英龍の功績に至りては、遙かに時流を拔いて實に維新文化の權輿をなして居る。世間には華族になつてゐるのが可笑しく見えたり不思議に思はれたりするものが少くはない、今江川家が華族であつたとして別に可笑しくも何ともない、否華族になつてないのが可笑しいやうな氣もする。

この地に入りて始めて學友山田三良博士が江川家の女婿であることを知つた、知らぬ事とはいへ二日前、長岡大使頭本元貞君の送別を兼ねた國際聯盟理事會で、君と卓をへだて、會談をした事であつたが、幕末に開國進取を强調した江川家と、國際法の權威たる山田君との間に緣の結ばれてゐる事も面白い。農兵に鑄砲に又韮山縣知事として盛名ありし三十八代英武翁は、既に七十四歲の高齡となつて居る。今病をもつて籠居し、親しく會談の機を得なかつたは遺憾な事であつた。

（追記）品川の臺場は近く海上公園として開放されるが、坦庵の建言した富津と品川の砲臺築造計畫は大分大きなもので、勘定奉行川路聖謨は經費の上より縮少を唱へ、坦庵は抗議して小規模のものでは用をなさぬ、

竹に繩をつけて品川沖に立ておくも同樣、費用の大小に拘らず國家の冗費なりとまで切言したとある。親しく佐久間象山を訪ひ又江川坦庵には目禮をかはしたといふ石黑況齋翁は、筆者の品川砲臺の話を聞いて象山の省譽錄を示された。

敝笱五章

敝笱在海、魚則唯々、狄人戲謔笑言有咥、比也笱以竹爲器、以取魚者也、唯々出入不制也、咥笑貌、笱當在河、而今在海、況其敝壞者、安得能取魚哉、宜乎其魚唯々然而出入無忌憚也、以此禦侮失策、而狄人之陵夷也

つまり魚をとる竹細工の道具は河に使ふのだ、それを海に使ふ、おまけにボロ〳〵に壞れてゐる、宜なり魚は平氣で自由に出入してゐるとひやかしてる、これが品川の

砲臺の事だ、象山は坦庵と親しかつたから、坦庵の憤慨に同情して一本冷罵をかましたのであらう、いづれにしても新海上公園には因縁をしるした碑文を建てて坦庵の名を長へに残したい。

（七、二三於三津）

七、江川坦庵と柏木忠俊

坦庵病篤しと聞き老中阿部勢州は

空せみはかぎりこそあれ眞心に
立てしいさをは世々に朽ちせじ

と歌うてある、水戸烈公は川路聖謨へあて

○江川大病のよし傳聞當時にありては一方の長城國家のため全快相祈り候

としるし、猶藤田東湖をして齋藤彌九郎の許へ見舞をさし立てたとある。

祭酒安積艮齋は

江川坦庵と齋藤彌九郎二人武者修業の圖　坦庵戯畫

江川家寶藏

前なるは坦庵、後なるは彌九郎なり。
大正四年三月雪湖撮寫

孝弟の道内に修り信義外に著はれて、恩威をもつて都民を撫し忠誠をもつて報國につくし、邊冠を憂ひ攻苦理趣を究め、もつて砲術の精をつくす、文武兼雄略超倫

と激稱して居る。

坦庵の門下生には前に記せし外若年寄本多忠德、勘定奉行川路聖謨、大槻盤溪等あり、坦庵逝くや安政三年七月十六日勘定奉行河内守松平

近直は自ら大乘經を寫して坦庵を追福せるのみならず、追善のための射的會を催せしに會するもの八千余人とあり、次で九月二十四日門弟二千余人追善の銃陳調練を行へりとある、如何に朝野の重寄たりしかゞうかゞはれる。

江川坦庵と共に逸すべからざるは柏木忠俊である、忠俊は坦庵を輔翼し次で英敏に仕へ幼主英武を擁して維新の變に京師に入洛し、勤王の大義と德川幕府に對する舊誼の間に立ち、鏤心彫骨病軀をもつて難關に處し、能く情義を全くする事を得た、後足柄縣令となり明治七年廢縣と共に病をもつて致仕し八年長逝してゐる。柏木忠俊の偉勳は彼の農兵の制である、忠俊は坦庵の遺志を嗣ぎ、思ひを農兵の制に置き、慶應二年幕府に農兵制を具陳して、全國諸州に實施すべき所以を建議し、一面まづ所管内にこれが實施に着手した、即ち管内の老幼婦女を除ぎ七萬九千二百人の内より、百人につき一人づゝ七百九十二人を徵し、内六百八人を一小隊卅八人よりなる八小隊を一大隊として二大隊で之を常備兵と名づけ、殘り百八十四人は散兵として豫備兵と名づけ、

農事の隙に調練せしめ、その經費は所在富豪の負擔とし、五年交代十年にて免役とし、事あれば出征し事なき時は盜禍等に備へしむ。前に記したる農兵の記事は實に病軀三町の徒歩も難かりし柏木忠俊の計畫にかゝりしもので、土肥では當時三人選拔せられ一人は今現存してゐると聞いたが、三島下田などにはいまだに農兵の調練場が殘されてある。

柏木忠俊は實に國民皆兵の先驅をなせる者として、その名は長へに後昆に傳ふべきである。

八、修禪寺物語

綺堂ものは好きだ、その中にも修禪寺物語が一等よい、綺堂ものとしてもよい、左團次ものとしてもよい。夜叉王の藝術觀そこに外人にも受けいれ易い氣分があるとはいへ、この戲曲がパリーのオデオン座に登場せられると聞いた時、これあるかな我意を

得たりと獨り合點をした。

鳴瀧の反射爐から下田街道に引きかへし、大仁(おほひと)から狩野川の支流に沿うてさかのぼれば、そこに桂川をさしはさみて修禪寺の溫泉場がある。溫泉場としてはあまりに世間から知れ渡りすぎてる、同じく知れ度りすぎてるが、範頼と頼家の墓にお詣りする。

親を手にかけた信玄はその子勝頼に至りて一族天目山に亡んだ、その勝頼の首を蹴飛ばしたり淺井朝倉の首を肴に杯を擧げたり、弟信行をだまし討したと傳へらるゝ信長は本能寺に弑せられた。その又あとを次いだ秀吉は秀頼を目に入れてもいたくないだけに、とう〳〵秀次に詰腹を切らせる、畜生塚を築きあげる、しかも可愛い秀頼は間もなく大阪城から、冥土へあとを急いだのであつた。

豹のやうな義經を、奥州に雪隱詰にしたのはまだ忍ぶべしとして、牛豕のやうな範頼、幾たびとなく頼朝に誓文ばかり出して恐縮してる範頼、それでもまだ恐縮さが足りないといふので、修禪寺の片隅に小さくなつている範頼の息の根までとめる、故あ

るかな源家の嫡統頼家は、その子一幡は比企の亂に死ぬ、己れも叔父範頼のあとを逐ふて、同じ修禪寺の露と消え、弟實朝は又兄の二子公曉と血と血で洗ふ、源家三代は誠や骨肉相食の歴史である。

佛説に過去現在未來三世の因果律を説いてるが、今世に業を作りて今世に果を得る順現業もあれば、次の世に果を得る順次業もあり、數世の後に果を得る順後業もある。

信長は順現業で頼朝、信玄、秀吉などは順次業ともいへる、世界大戰に出くはして千古稀なる大悲劇を生みたる、露國ロマノフ王室の沒落は、歴代の積惡の報と見て順後業とも見られるであらう。

こんな事を考へながら湯の街を通りぬけると、すぐ右に折れて山のなぞへの夏草しげる小道を、右に左にのぼる事二町足らずにさゝやかな森があつて、範頼の小さな石のほこらが小さい石燈籠を前にチヨコナンとまつられてある。

引きかへして修禪寺門前の虎溪橋を渡ると、山の中腹に道幅の廣い石段がつゞいて、登りつめると二位の尼が長子頼家の冥福を祈るため建てた、一切經藏指月殿があり、それにとなりて石階の上に頼家の塚がある、廣場にはヤレ築山、ヤレ祭具とか、いろ〳〵の名目で寄進の札がズラリとならんでる。

かうなると範頼の方は大分貧弱すぎる、湯の街の眼貫の場所でないだけに、地の理を得ないといへばそれまでだが、それにしても大分開きがある。範頼の墓側には、大分古い明治十三年といふに小山清三といふ人の建てた蒲侯の碑がさびしらに立つてる、墓前には甲府市志村甚兵衛といふ名前を刻したる石燈籠がある、その名前の上に新井浴客とあるのが筆者の注意をひいた、新井とは菊屋、淺羽とならんだ一流の旅館である。おれは範頼の子孫でも何でもない、縁もゆかりもない、といふてこの土地の者でもない、しかし範頼がいかにも氣の毒だ、ここに頼家の墓とくらべて大分に見劣りがする、おれは通り一ペンの旅の者だが、おまいりして見るとアンマリさびしすぎる、たゞ石のほこらだけだ、だからこの燈籠を寄進したのだと、新井浴客なる四字が雄辯に語つてるやうに感じられる。

地の理を得ぬといへばそれまでだが、それにしても頼家に比して詩的氣分が薄い、ごうも範頼の柄がパットせぬ、もつとも梶原平三景時に圍まれた時、信功院に火をつけて死んだといふから、最後だけはパットしたらしいがごうも何となく爺むさい、同じ兄弟でも義經とは大分人氣がちがふ、それだけに一層氣の毒千萬である。

今夜は三津ごまりだが、道すがら長岡の溫泉組合から是非立ちよつてくれといふ、時刻が大分のびて來た、少憩してすぐ引きかへす。

九、長岡、三津、土肥

長　岡　　石井睡蓮

滑らかな湯で一風呂あびて上つてくると、待合せた溫泉旅館組合の諸君から型の如く長岡發展策について聞かされる、夕なぎで熱い日だ。

大和館主人大和宇平君は二十余年前五十圓づゝの金を借りては堀り、借りては堀り、その十二回目にとう〳〵溫泉を堀り當てたといふ事から、今では古奈と合せて溫泉宿の數四十幾つ、やがては沼津から江の浦、三津濱を經て長岡驛に連絡する、環狀電車を完成するといふことだ、拔いてくれたビールのあわと共に勢ひよくふつかける。丹那がぬけ更に箱根越の遊覽電車も出來る事になれば口伊豆の發達は素晴らしいであらうと海南博士も受答へにたぢ〳〵である。

町のはずれに板倉勝憲子等の經營する華族村がある。研究會の鹿ヶ谷として時折りは新聞に賑はすところだ。山をむやみに切り開いてをる。大學を出て大量生產の豆腐屋を企て、自動車で配達せんとして、舊臣達から「御祖先に對しましても」を食つたが受け容れず勇敢に開業してこと〴〵く失敗したといふ、殿樣には出來過ぎた歷史付の御人の目論見だ。今度は豆腐のやうにこわれぬやうにと祈りながら、一行又汗ばんだ洋服をきて自動車道で二十分、トンネルを拔け山を下つて三津濱安田屋旅館にいる。

三津から土肥まで

七月二十四日、晴。

淡島がぽつかりと紺碧の土に浮いてをる。この島と陸との狹間にニュット富士山が見えるのが三津の自慢だが、生憎の雲でナンにも見えない。

宿の前で東京から來た女學生達がのび〳〵と發達した四肢や眞黑になつた顏をさらして賑やかに泳いでをる。よひに置きわすれたかむしろに朝露がつめたい。島山の岩かげ、松のこずえに魚見のやぐらが見える。富士、吉原の濱に打よせた黑潮のあはりがぐつと東にそれて、流れ込むのでこの濱は漁ろうの地として名高いのださうな、朝の膳からすゞきの洗が出て、

「いくらでもおよろしければお代りを」といふ

自動車を飛ばして江の浦靜浦の濱邊に涼風をいれつゝ沼津に出で、正午東京灣汽船の芙蓉丸に客となつた。芙蓉丸と名こそ匂はめ百トン船だ、支店長や船長事務長の好意で甲板にイスを並べてもらつたりむしろを敷いてもらつたりして僅かに凌ぐ。

日本人は船をいやがる航海を恐れる、海國に生れて怪しからぬと人もいひ、自分でも時々おしやべりするが、さて考へて見ると日本人の――少くも東京人の海國思想に甚しく障害を與へたものは、このかうしたの類ぢやないか、とフトあられもない考へが一過する。荷物や乘客の現狀ではこれで澤山だといふ說明も出るであらうが、少くも夏の房州、伊豆の旅などには是非もつと氣持のいゝ、船に乘つて家族づれでと勇み立つ位の設備が出來てもよいはずだ。外國の例など一々引きだすまでもまい、これが何より手つ取り早い海國思想鼓吹の道ではあるまいか。それやこれやの話の間に船は牛臥御用邸の沖から、淡島を左に、大瀨岬をまはつて戸田の港へと進んで行く。

沼津から戸田まで一時間、戸田から土肥まで一時間。

土肥で下船る。はしけで村の有志が出迎ひに來て自動車が待つてゐますといふ。山と海とに圍まれてどこへも動く余地のない村にも一臺の自動車があつて、海岸から溫泉宿への客を運んでをる。海南博士の說に從へばこれも「明治大正に生をうけし人々」の喜びであるといふ。ガタ〳〵と走つて街に入ると、この名譽ある文明の先驅者はドンと電柱に體當りをくれた、オヤといふ間に車も人もヨロ〳〵として横へそれると、その支柱へしたゝかぶつゝけて自動車は泥よけをこはし、ハンドルを曲げてペチヤンコになつてしまつた。人命幸ひに異常なく明治館別館にいる。

前のたんぼを隔てゝ大きな煙突から煙をだしてをるのが見える、土肥金山會社の採鑛地である。一風呂あびてブラ〳〵浴衣がけで見物にゆく、資本金二百五十萬圓の全額拂込、鑛夫數二百人、鑛石は全部住友が持つ、四國四阪島の精煉所へ賣り込むんだといふ。「まうかるかい」と聞くと所長の浦六左衞門、敵打で切られさうな名前の持主が、若はげの頭に汗をにぢませながら「四萬圓位まうかるだけだが、これからウンと

やるんだい」と力味んでをる、聞いて見るとおれの同窓だ。

夜は清雲寺といふ、あまり強くなかつたらしい賴朝の家來富永某といふ土肥の城主を祭つた日蓮宗の寺で一行講演をする。門前には二三の屋臺店が出て、氷や、ひやしラムネを賣つてゐる。いよ／＼もつてお祭さわぎだ。

湯の街ゆ松原見れば金山の烟りうごかす海はなぎてあり　海南

汽笛鳴れば湯の宿いでて旅人ら畑みちつたひ濱にゆく見ゆ　海南

十、堂が島と石廊岬

石井睡蓮

楚兄

おのしが一しよでないので朝酒は飲まず、ポーカーはやらず、到るところで海南博士と飢饉年のロシヤ農民みたいに水瓜ばかり食つて、聖地巡禮のやうな旅をつゞけて

伊豆西海岸の石廊崎

をる。

沼津からだん〳〵奥へすゝむにつれてお主の「放任の禮」が戀しくなつて來だした。ほしくないものを食はされたり、飲まされたり、接待に念が入りすぎて溫泉をくみかへ眼の飛び出るやうな熱いやつにいれさせられたり、前途がだんだん恐ろしくなつて來だした。

七時の一番で土肥を立つ、今日は相摸丸、二百トンの船である。

天城から分れて西へ走つた山々が、海にぶつかつてあはてゝウンと踏みこたへたやうに水のほとりで切岸になつた海岸線を見てをると、人の住めるところもなささうだが、入江ごとに猫の額ほどの平地があつて、人家がチラリホラリ、其漁村、農村を丹念に一つ〳〵尋ねて、船は南へ南へと行く。

仁科の港から依田松崎町長が出迎へに乘込む、やがて松崎についた、前田君等土地の人々に迎へられて上陸。中食後發動機船を仕立てて石廊崎見物に出かける。薄ぐも

りの靜かな日である。飛魚がスーッと飛ぶ、波は僅にうねりを見せるばかり。

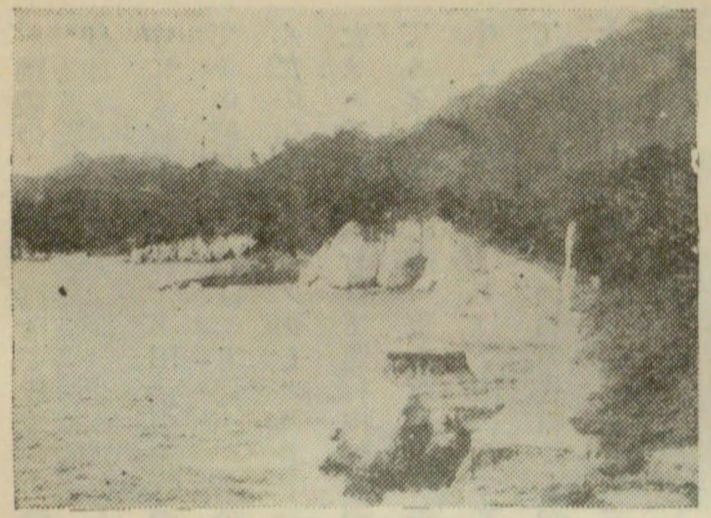
波の穗を眞一文字に飛魚のすれすれに
とびていまだ落ちずけり　海南

發動機船の音遠ざかりて七月のまひるの
海のしづかなるかも　海南

雲見淺間、波勝岬と船はすゝんでゆく、東道の前田福太郎君は竹柏會の同人、歌あり

漂渺たる海をはるかにはか雨
ふりすぎゆきてこゝにとゞかず。

きる波の岬の岩にをごりあがり

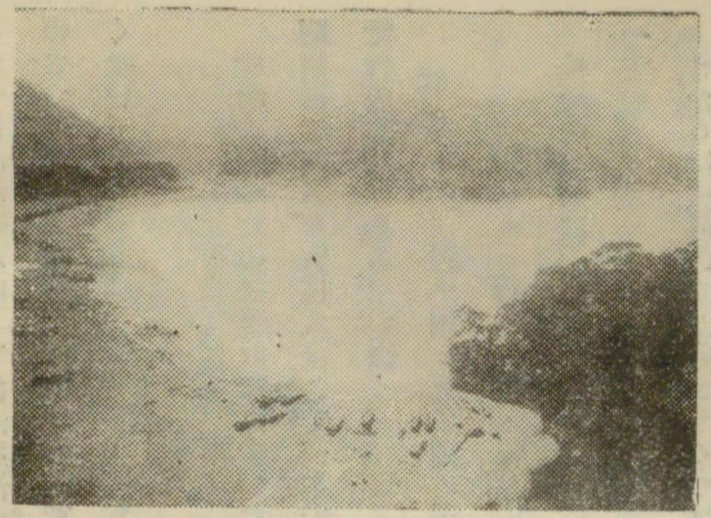


仁料堂島穴入口ヨリ高島遠望

しろくくだけてたぎつを見たり。

簑掛島、大根島、ぐつと左にまがると早、石廊岬の燈臺が見える、今は昔――全くさういゝたくなる――その昔の話、秋から冬にかけて太平洋の浪はきつと荒れ狂ふた、相模灘から遠州灘へ、あるひは西から東への往來の船が暴風に追はれて救ひをもとめつゝこの岸邊に近づく事が多かつた。その時あたりの里人はわざと暗礁近くに目印の火をたいて船を迎へた、難破！　慘死！　掠奪！　さうして里人達は懷を暖めた。福が來た、福が來た、福岩だ福岩だ、と死の暗礁は賛美のまとになつてゐたといふ。

難破のことから話は安政地震の當時、下田で破船した露國軍艦にとんでゆく、露國使節プチヤーチン、安政元年軍艦デアナ號に乘じて下田に入港、通商問題を議してる最中に安政の大地震、下田港の大津浪となつてデアナ號は底に穴をあけてしまつた。さてその修覆をせねばならぬが、あの港はいかぬ、この港はまかりならぬと、すつたもんだの揚句、時はクリミア戰爭中で英佛との關係もあつて戸田(へた)がよからうと、こはれたまゝで戸田へむけて進行中駿河灣でぶつこはしてしまつた。一行は戸田(へた)に腰をすえてスクーナ型帆船一隻を造り、翌年になつて引あげて行つたが、その打つゞく遭難の中にもプチヤーチンは下田に行つて通商條約を結ぶやら、佛國軍艦の下田入港を知つてこれを襲つて難破船の代船にしやうと企てたり、少からず活躍の跡を殘してをる。その多くの挿話の中で、大津浪の翌日、自分の船が破損して死者を出したにも拘らず、軍醫と看護卒とを下田番所に遣はし町民救護の援助をなさしめたといふ話は面白い、更に歸國の翌年スクーナ型船一隻に砲五十二門を乘せ戸田滯在中の御禮だと幕府へ獻



伊豆松崎海岸

上したなごはズバリと切れ味がよいではないか。日本はおかげで戸田造船から西洋型の船を造り得るやうになつたといふ。

いつの間にか船は燈臺にそふて長津呂の入江にはいる。なべ底を逆さにして、さびくちるにまかせたやうな奇妙な色と形の岩がムザと兩岸より相迫つてをる。その間をおあつらへ向に松の木が點綴して眞青の水に影を落してゐる。船を止めて幾百尺のがけの上、石室(いらう)燈臺へと上つて行つた。うす霞して七島も、八丈も、大島も見えない、遠く神子元、近く蓑掛の島々だけが雲煙の彼方に漂渺としてをる。大景だ、あいに

くこ今日は波靜かにして波濤胸湧の偉觀だけは見られない。斷崖の上に「石廊權現」。そのこつぱなに「緣むすびの神樣」。荒海の神樣もやさしい、野百合の花が斷崖の下に赤く咲いてをる。

× × ×

松崎に歸つたのは暮れに近かつた。春城院こいふ寺に長八鏝細工の辨天樣を見る。明治初年の名左官長八はこて一本でごんな細工でもしたこいふ。明治十年內國勸業博覽會の褒狀がある、いはく

「……、鏝ヲ用ヒテ各種ノ泥灰ヲ塗抹シ、水彩ノ設色ヲ描寫ス、衣紋滑格毛筆ヲ用ユルニ勝レリ……」

松崎の名物は「長八もの」の他には、毎年繭相場が日本で最初に立つこいふ、一寸變つてる。

こなり村仁科の堂が島ごうくつは石廊岬こ共に南伊豆で見落し難い壯觀である。洞門の幅十余間高さ數間、長さ百余間、舟行自在、大きさだけから見れば、カプリ島の瑯玕洞もくそ食へである。奥に底知らずの洞穴がある、その昔賴朝　密書をこれに投じたら鎌倉にちやんこ現れたこいふ、素晴らしい傳說が殘つてゐる。こんなニューヤチツクチユーブはニューヨークだつてロンドンだつて、どこにもあるまい。

楚兄

お主も一つ見に來ちやごうだ。

松崎より石室崎へ

伊豆の海あしたの海の沖べなぎて
天草(てんくさ)とる船のちらばれり見ゆ

海南

奥伊豆のこの松崎の海にして
　まさしく君と遇ひにけらずや（前田君にあひて）

甲板にしてよりくる小舟見つつあれば
　まこと心あてにしたる君立てり

そき立てる雲見淺間の大岩根
　まさをき海におとせり黑き影を

船の音におどろきて飛ぶとび魚の
　ながく〜ととびてやがて見えずも

伊豆の國のみんなみのはての燈臺を
　眞なつの空の下に仰ぐも

石室崎そき立てる岩のとつぱなの
　岩のはざまの山百合の花

七月のそらどんよりと曇りたり
　七島は見えず海のしづけきに

發動機の音遠ざりて七月の
　眞ひるの海のしづかなるかも

十一、下田條約

七十五里の遠州灘と四十里の相模灘を左右にたちきつた伊豆の半島、その突角にある下田の港、上り下りの唯一の船がかりとして、慶應年間伊豆金山奉行大久保長安は下田代官をかねて下田に水關を建てた。

下田の海の關所、ここには元和の二年秀忠の時から奉行が置かれる、船の改番所が出來る、大小の船荷は皆點檢して江戸行には下り切手、かへりには上り切手と稱せられたる通船證を付與する。寛永年間からは貨物出入の請次取扱をなすべく、かの大阪方面の菱垣回船、灘伊丹方面の樽回船、赤穗才田方面の鹽回船、その他各津々浦々よりの株回船の四組よりなる回船問屋が出來る、一年の出船入船三千艘を下らず、それが又長々と風待をする、そこで

伊豆の下田に長居はおよし、しまの財布が空になる

（囃）ヤレ　下田の沖に瀨が四つ、思ひ切る瀨に切らぬ瀨にやる瀨がないわいなア

といふ下田ぶしが出來る。ごうして丹後の宮津ごころで無かつたらしい。

さうした所だから黑船も折々下田に顏を出したに不思儀がない、しかし出された方は少なからず驚く、毛髮をたばにして頭上に直角に横たへ、殺人刀を二本までたばさみ、木片の上に兩脚をのせて、反り身になつた連中は、ヤレ開國、ヤレ攘夷と一ト皮眼をつるし上げて激昂しはじめた。

この間開港條約締結の衝に當つた連中は、國粹團や攘夷黨を背後にして、いはゆる異人さん相手の談判をはじめる、實全くやり切れたものではなかつたらしい。

嘉永七年の林大學頭、井戸對馬守對ペルリの間には、いはゆる第一下田條約、安政元年の筒井肥後守、川路左衞門尉對プーチャチンの間の日露和親條約、安政四年井上信濃守、中村出羽守對ハルリスの間のいはゆる第二下田條約

と前後三つの條約が結ばれたが、筒井肥後守であつたか

イギリスもフランスもみな里言葉
たび〳〵あふはいやでありんす

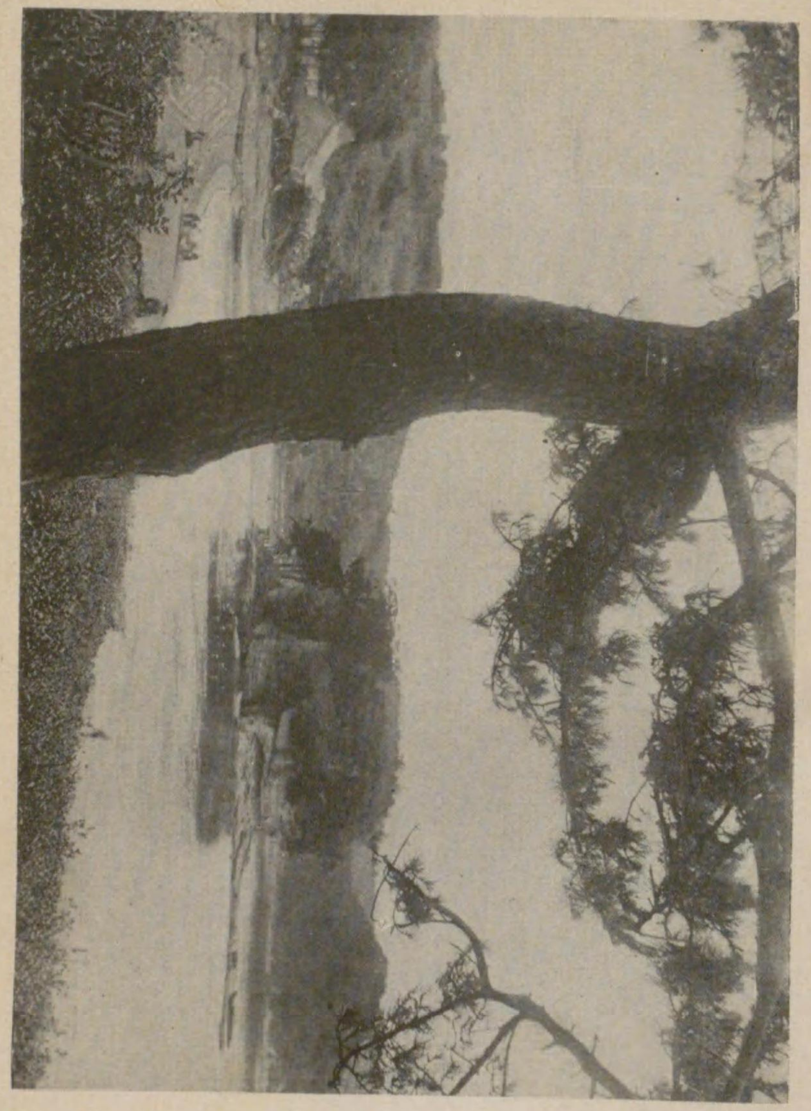
と歌つてあるが、實際一々通譯入りではイヤでありんしたであらう、その又筒井と兎

角意見に杆格があつた川路聖謨は

まがれるもなをきも同じ弓と矢の
巖をうがつこころづくしは

と歌つてある、國歩内外兩難の渦中に起ちたる、當面の人々の苦衷は誠に察すべしである。

黒船の來泊から下田にはいろいろの副産物がもちあがつてる、中にも有名なは吉田松陰の渡米事件である。この事件は松陰の日記スパールヂングおよびペルリーの日本遠征記などにより委曲は盡されてるが、何分にも唯漢文字だけによる日本人松陰と、怪しげな日本語の米人ウヰリヤムスと、不十分なる米語の廣東人羅森等の間にかはされたる、片言の日本語や支那文字や、手眞似身振りの交渉だから、名々の思ひちがひも少くはないらしい、そこへ當時の奉行なり町の人、牢獄のかゝりの人達の文書や口傳



（島天辨崎柿田下）島たし田ぎ舊の蔭松

へに、又それ〴〵の相違がある。下田の村松春水君……一寸見は三十そこ〳〵、よく見て四十からせい〴〵五十位に見えて、その實當年こつて六十九歳こいふ……は過日東京放送局で吉田松陰こ題し、その乘船に次で傳馬船漂流の次第、さてはバッテラーで上陸するに至りしいきさつ、番所における取調べから平滑(ひらなめ)に入獄の模樣、獄卒の心づかひなど、松陰の日記こその間多くの隔たりがあるこいふので、遂一その眞相なるものを放送したこいふ、今同君から親しくいろ〳〵こきかされもし、又石井信一君の下田開港史を見るこくさ〴〵の事情が說明されてあるが、結局今まで至極簡單に片づけてゐた松陰の下田事件も、讀めば讀むほご聞けば聞く程だん〳〵分らなくなつて來た。素人はあまりコンナ事に立ち入りはせぬ事だ。

十二、吉田松陰疥癬物語

唯松陰が無事に乘船出來て渡米したとすれば、定めし維新の元勳こして偉功を奏し

たらう、その内に征韓論の騒ぎが起る、海外視察に眼ざめて岩倉、大久保と説を同じくしたか、それとも舊により廿一回猛士である、西郷、江藤の轍を踏んだらうか、いづれにしてもこの米艦に乗るか乗らぬかは、日本の歴史に大した影響を來たしたわけである。

一説にはペルリもその熱誠に動かされて乗船を許さうとしたが、軍艦は松陰の双手かいせんのために汚れたるを見、艦内の衛生上反對して遂に逐ひ返さるゝに至つたとも傳へられてゐる、かいせんの有無が乗船の許否を決する唯一の原因でもなかつたらうが、兎に角かいせんで汚なくなつてる事は、遂ひ返さるゝに預りて力ありし事はうなづかれる。

下田の港は犬走島を中央に、西の方城山公園は古松老杉鬱蒼として懸崖千仞紺碧の海に臨んで居る。天正小田原の役清水上野守正令、秀吉の水軍志州鳥羽の九鬼嘉隆、土州岡豐の長曾我部元親、淡路洲本の脇坂安治、同じく志知の加藤嘉明、家康の水軍向

井兵庫頭正綱、本多重次等の軍勢を迎へて奮戰した鶏島の城跡である、これと反對に東に當りて柿崎の一角彼のハルリスの領事館を開きたる玉泉寺の濱邊に辨天島がある松陰金子重輔と安政元年三月二十七日傳馬船を米艦に向けてこぎ出したところで、松陰遺墨七生説の碑が建つてある、辨天島に往事を追懐し更にオウトを驅つて蓮臺寺の溫泉石橋旅館にいる。松陰日記の三月二十日の條に

余芥蘚稍發す因て間を偸み蓮臺寺村に往て溫泉に浴す

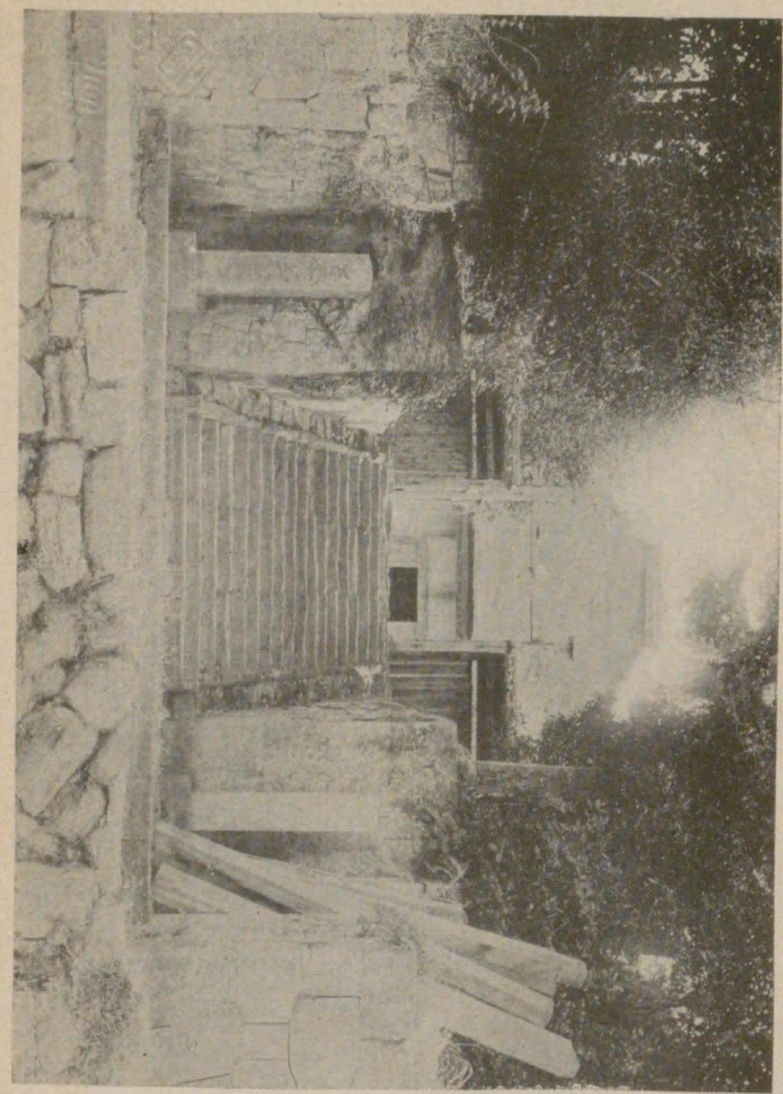
とある。旅館の西方一町余の地には松陰一時假居した茅屋が見える、傳ふる所では松陰が獄に下るや、下田の市中には由井正雪以來の大事件と許りに騒ぎ立てる、假居したるこの茅屋の爺さんはビックリ仰天して、松陰の殘せし文書類手回り一切をまとめ引つかついで鍬を手に飛びだした、どこへどう埋たのかそのまゝ分らず仕舞に爺さんは亡くなつたが、あとになるとアノ松陰はエライ人だつたと評判が立つ、サアあの爺さんが埋たといふ松陰の遺物を堀りだせとばかり、有象無象があとに殘つた婆さ

んに心當りを尋ねるが分らない、何んでもアノ方角へむけて出かけたやうだと聞いて、矢タラにその邊をアチコチ堀りさがしたがつひに見當らなかつたといふ。

松陰の渡米出來なかつた事はかへすがゝも心殘りの事である、しかしあれから江戸の傳馬町、次で萩で野山の獄、次で杉家に幽囚となり、それからが例の松下村塾となる、僅かに二年半とはいへ其間に生みだした村塾々生の維新の活躍を見れば、國の上から見て松陰の米艦搭乘の不成功は弔すべきか祝すべきか、神ならぬ身の知るよしもなしである。

蓮臺寺の溫泉も共同湯は少々濁つてるさうだが、この旅館のは無色透明きれいすぎる位だ、これがかいせんによくきくのかごうか分らないが、同じかいせんでもかかつた人と境遇次第では、大きな運命を左右するこもいへる、かいせんだからこて馬鹿にならない。

（廿七日湯島溫泉に清流の音を聞きつゝ）



寺院王田丁鶴重鎮の初最本日

十三、唐人お吉と下岡蓮枝

下田黑船來泊の副產物には、彼の我國西洋型船舶建造の範を殘したる、露艦デアナ號の大破事件もある。さうかと思へば戀のハルリス唐人お吉物語もあれば、下岡蓮杖寫眞物語もある。

下田の敎坊に艷名を歌はれた明烏のお吉、又新內お吉の稱ありし十七歲のお吉は、安政四年であつた、幕吏の强壓と支配組頭の勸誘により、情人鶴松との愛を割きて、當時五十四歲のハリスの侍妾となつたのが序幕となる。

それから三年目にわけありてハリスを辭し再び敎坊に現れる、のち放浪の旅に上り情人と再會する、いくばくもなく別れて三度左づまをとる、ハリスの死を聞きて神奈川に墓を建て故人を弔ふ、とる年波に痼疾に惱みながら、ハリス遺愛のコップに冷酒を盛つて新內を歌ふたお吉は、とうたう半身不隨となる。遂に明治二十三年五十歲に

して下田郊外河内門栗の淵に身を投じる、大正の十四年薄命なるお吉のために一基の塔が建つ、米國大使バンクロフト氏下田來遊の時、使をその墓前におくり捻香といふこころで大團圓となる。このロマンスはごうかといへば小說か脚本むきであるが、村松春水君は近く世に公にすると力んでるから、こゝにはたゞ荒筋だけ拾つておく。

唐人お吉は日米親善通商條約に功ありしといふ、それは間接に功があつたには相違ない、筆者が臺灣在職中南洋のある地方と交渉事件のあつた時親しく報告するには、今の先方の理事官は我天草女をそばに置いてゐるので、諸事交渉にも便宜多く好意を持つてくれてるが、そのうち暇暇歸國する、さうなると留守中にこの事件は逆轉するから、是非その前に解決するやうにしたいからと、巨細となく天草女禮讃の說教を聞かされた事がある。

お吉擁護論者の村松君の話は半分にも又二倍にも、聞く人により勝手に割引なり割增をしてよろしいが、お吉によりて萬里異鄉の客の旅情を慰め、多少とも日米親交に資するものありしは疑を容れない。

下岡蓮杖は下田の產である江川英龍と相並んで伊豆が生んだ偉材と思ふ

ごうせ寫眞はいつかたれかゞ眞似をして覺えるであらうと、一口にいつて仕舞へばそれまでだが、下岡蓮杖は實にその寫眞術を學ぶため、先覺の士として異常の苦心を重ねたのであつた。彼は天保六年十三歲にして畫家たらんとし、下田より江戸に出たといふ。漸くにして狩野董川の門に入り董古と稱した、一日知人の家で銀版寫眞を見てその技を學ばんとし、ハリスが玉泉寺にありと聞き江戸より下田にかへる、外使給仕役となりこれに接近をはかり、ハリスの秘書兼通譯官ヒュースケンにつき、はじめて寫眞術を學んだが、當時寫眞は切支丹伴天連の魔法と稱し、寫眞をうつすと三年の內に命が無くなると傳唱された時分である、蓮杖は武山(ぶざん)中無人の地にいりて撮影の法を研究せるも、もと〳〵ヒュースケンも專門家でない、蓮杖には藥液の名さへ分らない、この間の苦心は一方でなかつたらしい。その後橫濱が開港となると、すぐ出かけて

寫眞師ウンシンにつき教へを乞うたが、ウンシンは惜んで教へてくれない、漸くに寫眞器と彼の畫と交換する、蓮杖はこの寫眞機と使ひ殘しの少量の藥液により、苦心慘憺遂にその技に達しそれから江崎禮二、鈴木眞一等多數の徒弟を教養したといふ。

油繪に、パノラマに、石版印刷法に、牛乳の搾取に、蓮杖は我國文化の先驅者であつた、現に京濱間を汽車の通ぜざる前に、蓮杖は馬車でこの間を往復したといふ、一寸面白いぢやないか。

今下田で寫眞界の一部の人達で翁の建碑の企てがあるといふ、筆者は下田町講演の壇上でも、翁のために一言した、同時にこれが建碑は必ずや翁の心血を注ぎたる記念の地玉泉寺たるべしとつけ加へた、今日吾人は新聞に雜誌に、日夕寫眞の恩澤に浴してゐる、あらゆる科學界はもとより、藝術品としても寫眞の効果は普及向上しつゝある、寫眞で迷惑を感ずるのは指紋をとられる前科者位である。

松陰が傳馬船を仕立てた辨天島を右に見、左折して少しく上れば我國最初の領事館の舊趾たる玉泉寺がある。ハリスの室にあたる天井は、寒さ凌ぎにはり付られし紙が赤黑くくすぶつたまゝ、ところ〴〵はぎ殘されてある。煙突のチューブを通した穴も欄間の上に昔のまゝ開いてある、本堂正面を隔てゝ向ふ側には例のヒュースケンの部屋がある、こゝへ寫眞の研究にうき身をやつしたる蓮杖が毎日通ひつめたのだ、その同じ本堂の建物から毎朝外に出で毎夕内に入りし鋲打ちの乘り物駕、いかめしく警固の者に護られて、中には當年十七の明烏のお吉が運ばれたのだ。

下田から下賀茂にゆく、途上例の慶長の宮女遠流の遺跡がある、下賀茂の溫泉は豐富で多量に噴出してる、下流には海軍の湊病院がある。

下田の町には奉行所、番所、臺場の遺跡もあれば、外船に薪水食料を供給した缺乏所のあとともある、將軍家茂の越年した海善寺、武ケ濱の農兵調練處、さては松蔭の假の宿、拘留されし長命寺、平滑の獄など名所舊蹟が多い。自働車の便も夏の海路のありがた味も分らずに、此奥伊豆を知らぬ者の多いのはどうしたものだ。

十四、白濱から天城越

石井睡蓮

蓮臺寺を出て下田から山越えに、海南博士の「地方財政」起稿のため書きいれにしてるといふ模範村白濱村にいたる。心天草の採取權を村が持つて、その收益で村費を拂ひ、いろんな基本財産に多少づゝの繰入れをなし、尙かつ毎年各戸に若干の配當をなしてをる。飯田村長豫算表をだし、村治一班をくり擴げて詳細に說明してくれる。

村有基本財産が卅餘萬圓、學校基本財産が三萬圓、罹災救助資金五千圓、育英資金二萬三千圓とあげてくると成る程どうなづかれる。昨年は心天草採取の總利益から村費繰入れ、育英資金繰入れ等を差引いた殘り十三萬二千圓を三百六十餘戸の村人に平分したといふ。一戸にすれば約三百六十圓に當つて居る、卽ち村費全部を支拂つて尙三百六十余圓の收益配當を受け、これに自分達の勞役收入なり、その他の收入と併せて、平和にその日を送つてをるといふわけである。

白濱一帶の地先水面には二百にあまる心天草取りの船が浮んでをる、毎年五月から十月までが採取期だといふ、夫は船をこぎ、妻はもぐつて、夫婦共かせぎが多い、引かきといふ漁具をもつて海底を引ずりながら採取してをる船もある。

「うらやましい狀態ですな」

といふと村長さんは微笑しながら、

「こゝまでくるにはいろ〳〵苦しい事もありました」

と話を進める。慶長の昔から村の心天草採取權は認められ、田地肥料としてこれを用ひて來たが、文政に至つて水野出羽守の手許に取あげられ、始めて寒天材料として大阪などの市場へ送りだされた、その後幾多の變遷があつて明治五年再び採取權は村に戻つて來たがその利益配分は旦那衆に厚すぎ、小前に薄すぎた。明治二十年頃自由平等の叫びはこゝにも及んで、以來收益はすべて各戸均分といふ事にきまつた。

村のいらかも美しい、ごこやらに豐かな風が吹いてをる。かうなると他村からの移住者が殖えて來た、むやみに移入しては村が立たなくなると「白濱村漁業資金配當に關する規程」を設けて他町村から轉籍者は二十年經つて十分の五、三十年をへて始めて一人前の配當を受ける事とし、その轉籍にもいろ〳〵の制限を加へて來た。一寸アメリカの眞似ですといふ。全村の戸數四二五、そのうち配當を受くる家三六〇餘戸といふのが現狀である。

「配當を受けてやうやく暮して行くだけです」

と村長さんは滿足なやうな、物足らぬやうな表情をした。

辭して又自動車に乘る、雨がぱら〳〵來たがすぐ晴れる。谷津溫泉で午めし。德富蘇峰翁の一行と出あふ。

こゝより天城越えにかゝる、名にし負ふ天城越えも道坦々として何等の危險はない、御用林の針葉樹相は、濃きみどりをこめて、涼風水の如く流れて來る。山に甘茶の

木多く、これを帝に獻じた由緒から甘木山と呼び、いつの間にかそれが天城山となつたと物の本には書かれてある、明治初年日本で造つた軍艦天城の艦材は全部この山から切り出したものだ。海拔二千八百尺のトンネルをぬけるとやがて湯が島に着く。

このあたり清流を引いて段々畑にそゝぎ、わさびの栽培をしてをる、出迎への大川村長の話にその產額年六七萬圓に上るといふ。

今よひは水の音をきゝつゝ湯が島落合樓泊り、山女の煮〻、鮎の鹽燒に杯をあげやうと存じまする。

十五、丁と出た賴朝と八重媛

世の中はかごに乘る人乘せる人
腰の痛さよ肩の痛さよ

時は眞夏七月の末である、送迎、案内、宴會、講演、お客になつてるわれ〳〵も、これを迎へる土地の人々も何れも樂ではない、たゞ當方にとりては毎日耳新しい眼新しい、のが目つけものだがしかし相手かはれごぬしかはらずでは可成り氣忙しい、それでも去年北海道の十九日間十九回の講演三十二回の歡迎會の時の事を思へば大分荷が輕い、とはい今へ度は旅中旅日記に筆を執らねばならぬ、樂ではない。

石井睡蓮臺灣總督府參事官のみぎり、故北白川宮殿下妃殿下御同列にて御渡臺となり、島内をお伴してゐたが、睡眠術の奥儀に達せりとありて、親しく殿下から睡蓮の名を賜つた、天下御免の居眠りの名人であるが、自分の旅日記受持の日となると、得意の居眠りを封じて折々は手帳になにがしか書きとめてるところなど、近頃もつて殊勝の至りで誠にいゝ氣味である。

湯が島の一日に兩人共原稿の整理が追ひつく、明くれば二十八日太田縣議に迎へられて、伊東祐親親子、源頼朝、河津祐泰、工藤祐經、曾我十郎五郎の連中の、す

こぶるややこしい六角關係發生の地たる伊東に向ふ。

人間は色を好む、英雄は人間なり、故に英雄は色を好む。

頼朝は英雄なり故に色を好む、英雄でなくとも人間である以上色を好むに不思議がない。

頼朝は十三歳にして平治の亂に戰ひ、幼名通り鬼武者として武名を擧げてる位だから早熟の方である、だん〳〵年を重ねる、ニキビもできてきたゞらう、聲變りもして來たゞらう、ごうしてモウ三十に手が屆いて來た、ニキビが下火になつてしまつてるころだ。身分職業はといへば無職の浪人である流人である、いはゆる當節の失業者であつて、さて食つてゆくには不足がない、腹のへらない發情期の失業者である以上、至るところ發展したに不思議がない。

頼朝は手始めに伊東祐親の息女八重姫と情意投合する、投合の結果千鶴丸が生れたが、大番頭として京に詰めてゐた父祐親は、伊東にかへつて娘が人もあらうに流人の

頼朝と通じ、子まで出來たと聞いて眼をまはした――おのれにつくき八重姫とムカ腹を立てたところへ、生さぬ仲の後妻がそばから大分たきつけたらしい、六波羅への聞えもはゞかりありといふので、千鶴丸を松川の淵に沈める、血を分けた孫を手にかける位だから、頼朝を殺さなければ腹の虫も納まらねば、平家に覺えもいかゞとある、ところが二子祐清はそれはおよしなさいと止めたが聞きいれないから、頼朝に内情を通じる、かうなると色男も七里ケツパイで、宇佐美綱代の險を越え、はう〳〵のていで伊豆山へむけスタコラと逃げだす。

十六、新編會我物語

話しかはつて安元二年十月の十日、赤澤山の狩倉に河津祐泰は所領の爭から一族工藤祐經の家臣、大見小藤太八幡三郎の遠矢にかゝり敢ない最期を遂げた、それから十八年の天津風遺子曾我十郎五郎の兄弟が、富士の卷狩に工藤祐經を討とり父の仇を打つた事は、あまりに世間樣で知られすぎてゐるが。なぜに河津祐泰が遠矢にかゝつたのか一向に知られてゐない、それでは祐經が少々可哀想であります。

起りは所領の爭ひとあるが、元來伊東宇佐美の三が庄は工藤仲繼の所領であつたところ、仲繼病あつく死に臨み、悴祐經幼少なるにより、弟伊東祐親に後見を賴んだ。ヨクあるやつだがこの後見人慾の皮がつつぱつてる、工藤の所領を猫ばゝをきめこみたい、が世間の思惑もあるから、祐經は十四歲の時にこれに長女をめあはした、その内次第に自分の勢力の根が張つてくると、祐經は成人してもこれに土地をかへさうとはしない、かへすべき所領をかへさずに一旦嫁にやつた以上、かへすべからざる娘を引き戻して土肥次郎實平へ再嫁せしめた。祐經憤慨するやら、いとしい戀しいで、手勢を引き具し、女房取戻しのため土肥を攻めたが擊退される。戀女房はとられる、所領を酢のこんにやくのといつて返してくれぬ、祐經はじめ家の子郎黨の口惜しがつたに不思議はない、たゞ話を聞いただけでも腹が立つだらうぢやないか。

工藤は源氏方伊東は平家方となつて居る、六波羅へも訴ふるに途なく、さて正面から手向ふだけの實力もない、そこで八幡と大見の兩人は赤澤山の狩倉のかへり途を、椎の木三本で待ち伏せた、伊東祐親の長子河津三郎祐泰が一の峽に見えた時は、兩人いまだ矢にかけやうとは考へつかなんだが、二の峽に見えた時敵の片割れだ平家方だ、やつつけらうと遠矢にかけた。あとからつゞいた祐親が一の峽に見えた時、へうと放つた矢は爺さんの鼻先三寸を流れていつた、更に二の峽に見えた時又第二の遠矢をかけたら、かぶら矢は祐親の左指二本をそぎ落した、祐親指を落されて驚いたが、そこに長子祐泰の亡體を見て怒り心頭に發し、あとよりつゞいた二子祐清に曲者打ちとれとあぶみをたゝいた、祐清は家の子郎黨を引きつれおしよせる、八幡は腹をかき切る、大見は逃げ損んじてからめられたとある、なんと御立ち合ひ考へて見ると大見八幡も割の惡い可哀想な男では御座らぬか。

曾我兄弟を引き立てるためには祐經は芝居でも赤づらになつてるが、叔父祐親が非道な事さへしなければコンナ羽目にはなら無かつたのだ、しかしごれもこれも成りゆきだ、祐經は富士の狩屋で暗討にあつて見ると、今度は一子犬坊丸が五郎の首をはねて仇討の仇討をしたいと願ひ出る、流石の頼朝もこれには小首をかしいだ、十郎は死んでしまつてる、それへ追つかけて五郎を首にする、又仇討の仇討と際限なく、お次は蝶六その次は大磯と順々に首にしては曾我の家一座が全滅となるから、この邊で打止めにしやうと、伊東工藤兩家に手打して仲直りをさせたといふ、その祐清のあとが中國筋の大名伊東であり、祐經のあとが日向飫肥の伊東であるといふ。

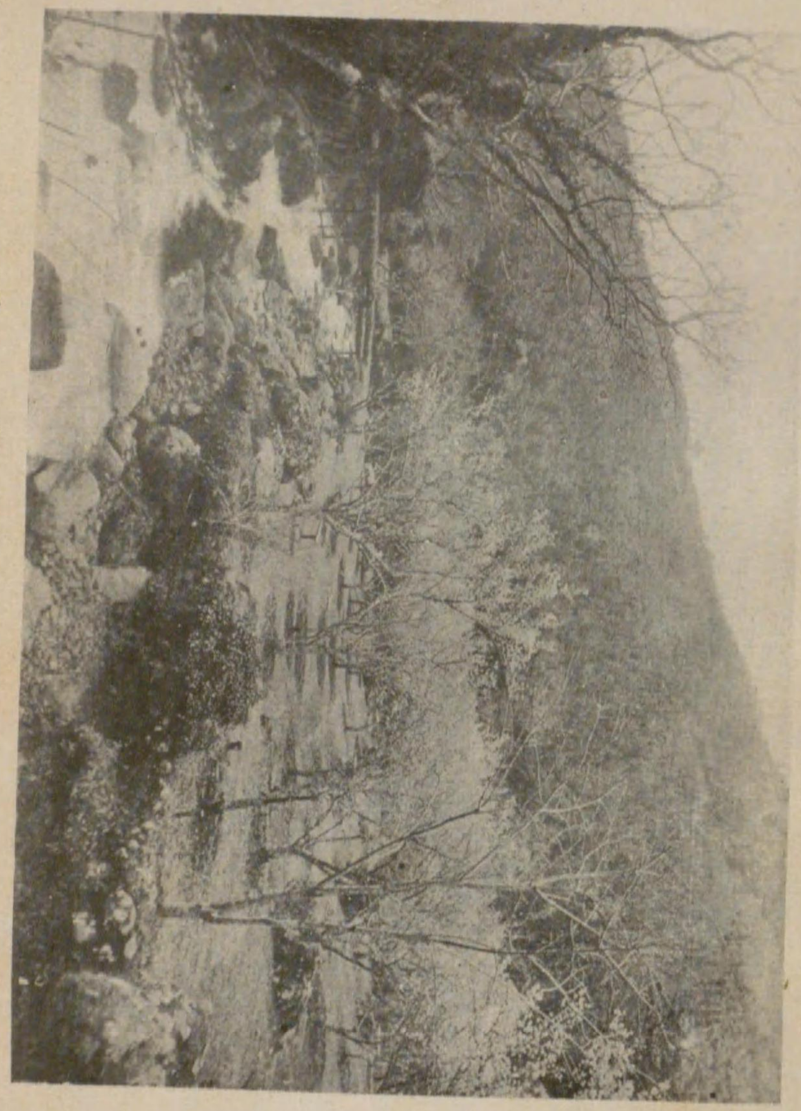
話が大分枝から枝へと花がさいた、この邊で頼朝に戻る。

十七、半と出た頼朝と政子

伊東から北條へ逃げのびた頼朝はすぐ時政の娘に着眼した、退屈しのぎとか性慾の衝動とかいふ外に、當時の頼朝としてはその土地の有力者と親しい關係を結びつけ

る、つまり政略結婚が必要である、甘い戀をさゝやきつゝかたはら相手の娘を人質にとるのである、それも流人であり孤兒である賴朝は、勢ひ直接行動に出る外はない、時政には娘が二人ある、姉政子は美人だが繼子である。妹浦代は二の町だが後妻の出である、伊東の八重姫で手を燒いた賴朝はモウ繼子にはコリ〳〵した、二の町でも三の町でもよろしい、浦代と手を握らうと安達盛長にラブレター！を託した、ところが盛長は政子の方が別品でありしつかり者である、浦代では結局あとが納まらなくなると思ふたか、それともはし豆の賴朝だ、あとで三角關係にでもなると事面倒とでも思ふたか、浦代あての手紙を政子へ手渡したといふ、隨分思切つた事務管理で、法律上この意思表示は戀愛の當事者の重大なる錯誤として、當然無效たるべきであるが、この戀は事實成立してしまつた。

この時丁度政子が妹の吉夢を凶夢と僞り、賣る者は禍を免れ買ふ者に咎なしこれ移轉の法なりと、恩にきせて唐鏡一枚衣一襲で夢を買うた時だといふ。どうも女の不見



轉はあるが、男の方から不見轉の付文は振つてゐ、又女の方としても相手は評判の源家の御曹子である、垣間見位はしてゐたらうと思ふが、マアそれはごうでもよい、困つたのはこれが又時政の留守中の出來事であつた。

時政京よりの歸り途に、目代平兼隆と行を共にしたが、その旅路に兼隆から娘政子を嫁にくれといふ話が持ち上つて、よろしい差あげませうと約束した。ところがかへつてみると留守中に賴朝はチャンと政子を手にいれてある、今時の若い者は馬鹿に敏捷だ、ごうも油斷も隙もないナアと感心はしたものゝ、目代兼隆への約束にはハタと當惑した、しかし時政は祐親とゆき方がちがつて、マアなるやうにしかならないと、知らぬ顏の半兵衞で目をつぶつたまゝ政子を山木の館におくる、ところが八重姫の如く從順ならざる政子は、尻に帆をかけて山木の館を飛び出した、面目をふみつぶされた兼隆は血眼になり八方に手を分け政子の行方をさがす、かうなると時政も乘るかそるかといひたいが、實はモウ反りの一手より外はなくなつた。

そこで歴史では治承四年以仁王の令旨をうけ、頼朝兵をあげまづ時政をして山木に平兼隆を襲うて首を刎ねたとある。

十八、尻摘祭

伊東では歓迎の宴から講演、翌朝は太田古見坂田の諸君をはじめ町の有志の案内を受て、北里博士の萬人風呂をはじめ日蓮上人や伊東祐親の遺跡なご見物に回はる、面白いのは唐人川に熱帯地でなければ見られぬ、湯鯉、毒魚、じんなら蛇うなぎなんご棲息し、それが淨の池といふ古池に收容されて、今や名勝記念物に指定されてる、この唐人川の川尻で例の慶長十年より十一年にかけて、英人ウイリアム・アダムス事三浦按針が、浦賀に漂着したるマニラ提督ロドリコを乘せてメキシコに航せりといふ、百トンのサンタ・ブェナ・ベンツーラ號を造られたといふ、彼の家康の時の安宅丸といひ、戸田の幕末の造船といひ、伊豆は日本の造船史には因緣の馬鹿に深いところである。

千鶴丸を柴づけにしたといふ松川の下流に日暮の森と音無の森がある。頼朝は八重姫と密會すべく日暮しの森で日が暮れるのを待ちわび、暮ると川を渡つて音無森でおとなしくランデ・ブーをしたといふ。こゝには音無神社といふお宮がある、毎年十一月十日に祭典があり、その時は點燈は禁じられ暗やみの中で無言のまゝ式を行ふ、神前で神酒をのむときは口は利けない眞くらだ、尻をつまんで合圖をして土器をまはす、いはゆる尻摘祭といふ儀式で、頼朝八重姫密會の故事にもとづいたといふ。

筆者が宗旨ちがひの史跡調査？　伊豆めぐりといふので、至るところ故實家が、色々と議論をたゝかわす、この音無森についても密會とはうそだ、祐親は不在二子祐清は源氏方、なにを苦しんで森の中で密會の要あらんやといへば、後妻豐田の方もあれば長子祐泰もあるからは大びらにも參るまい、ソウ頭ごなしに抹殺されてはたまらぬといふ。

案ずるに密會の内容にも色々と解釋があらうが、かりに館でいはゆる密會をして居ても、たまには手を引いて郊外の空氣も吸ひたからうぢやないか、今ならば自動車で一寸熱海までドライブとシヤレたいのだがさうもいかぬ、せめてこの森あたりで手をとりあふて散歩でもしたからうぢやないか。傳說は傳說たらしめよ、賴朝とても木や竹ぢやない、天下をとつてからの賴朝には理智が勝ち過ぎてるとても、尻まで摘まんだかどうか知らないが、マアこうしたところに賴朝の人間味もあるといふものだ。

十九、初島のパツカリ

大島の高ねのけむり雲のうちに
凝りてうごかず片くもりせり

月今し雲間にいりていさり火は

初島あたりまたゝける見ゆ

伊東熱海の間には宇佐美網代の險がある、三十年前のわらじの旅で隨分汗をかゝされた、今日は熱海町長の一行に迎へられ、自動車で凉風をきりながら海岸を縫うてゆく、山水の風光得もいはれず誠によいドライブである。

熱海伊豆山と來ては今更紹介するがものはない、富士屋ホテルで晝餐をすませ一行丹那トンネルの入口を下に見て、ごなたも先刻御承知の梅園にゆく、梅園といふても松あり杉あり、春は櫻、夏は青葉、秋は紅葉と四時の眺めがある、梅園と名づけられると日本人の事だ、たゞ梅時ばかり出かけて手當り次第梅花を手折る事にきめてるやうだが、名は實の賓なり宜しく熱海公園と稱すべきである。

熱海と伊豆山の中間絶壁を背に海洋に面してる熱海ホテルの歡迎會に臨んで居ると、溫泉寺の講演場から矢の催促がくる、いよ〳〵打止めの壇上でオシヤベリをす

る、汗は伊豆山相模屋の千人風呂で流す。

今日は初島行とある、海上約三里そこに三百五十人近くの浦人が住んで居て、戸數は昔から四十一戸と相場が決まつてる初島、病人が出來ると南の濱で火をあげ、網代の醫師に驅けつけるのではない、漕ぎつけてもらふ初島、警官は熱海から戸口調査や衞生視察に年三回くる外にとんと用がないといふ初島、石井睡蓮からは與謝野夫婦と曾遊の地としてかねぐ〳〵ウント聞かされてる椿と水仙の初島にでかける。

一行は石渡町長と富士屋と相模屋の主人、それに警察の署長さんに地元の中田君である、ところがイザ出かけるとなつてから同行のはずの睡蓮君は急にかへるといふ、逗子の子供達が懷しく里心がついたのだらうが、署長さんが波が立つて來た、モウ少し樣子を見やうといふ一言を小耳にしたに相違ない、そのいひ草がよい、ごうも同行に和尚さんが見えた、波の上が恐ゝいといふ、成程溫泉寺の住職鷲嶺師の顏が見える。學生角力の大關柔道三段體重二十一貫の睡蓮も、船になると謙讓の美德を發揮する、

惡留めせずにかへす。

發動機船は宿の前から初島さして、ゴト〳〵音を立てゝのり出した、靜なるべき海上は島近くの瀨にかゝつて、大にゆれはじめる、ハゝァ矢張り和尚さんが一枚入つてるからだナと觀念するとすぐ靜かになる、よく〳〵見ると和尚さんの隣には伊豆山の神主北山の大人が控へてる。

初島では區長さんがアチコチと案内してくれる、この島は矢張り四十一戸ですかといふと區長さんいはく、

『別に規則といふ譯もありませぬが、この上住む場所もなし、それ以上の人が殖えると、自分から奮發して海外に參ります。』

區長さんの海外とは伊豆の國だからおもろい。

浦人は俗にぱつかりといふ追込網を見せてくれる、十年程前琉球人が來て敎へたものだといふ、一貫五百のオモリのついた長い紐、それにショウギの木片をところどこ

ろに結びつけたものを、二三十ヒロの海底までぶら下げて、三間おき二間おき一間おきに漁師の人垣が、次第に網へむけて追ひ込んでゆく、兩船相迫りて網を引きあげるこたひやさばははつらつとして我等の船にはね飛んでくる。

初木神社の松の木かげでテーブルやイスをかり出して、ビール、サイダー、西瓜の宴を張る、かねておみやげにと持ちこしたお菓子を振舞ふこいふのじ、河童のやうな子供達眞つ黒になつてたかつてくる、娘の子や中年増や大年増は、後方約五メートルの間隔を保ち、喜びの色に滿ちてる我子達のむら立てる姿に見いりながら、野天に置酒高會せるわれら一行を流し目で見てる。

伊豆山の神主さんは京鏡かなに鏡かに、初島の婦人は容色絶倫こほめちぎつてあるこ大分前觸れは大きかつたが、それほどの事はゴザンせん。

浦人に別れをつげ初島を一周して魚見崎錦ヶ浦の鼻にむけてかへる、熱海の街を左舷に見つゝはや伊豆山に近き頃、水上二丈足らずのところに松林の中に圍まれた小さ

家が一軒ポツンと立つてある。

この家は五丈ほど上の斷崖に沿へる熱海街道の茶店であつたさうだが、大正十二年あの大地震に茶店の夫婦は御取膳でお晝のおまんまを食べて居ると、急に前のがけがずん〳〵と登つてゆく、アレ前のがけが上つてゆく、ごうした事だらうといふてる内に、いつか止まつて動かなくなつた。おかしな事だと外へ出て振り返つた拍子に、今まで懸崖の下に見下してゐた海面が、スグ眞近に迫つてるのを見た時は、イヤ驚くまい事かびつくりせまいか。

樓門五三桐では石川五右衞門君は煙管を手にしながら、南禪寺の樓門ごと諸(もろ)に舞臺へセリ上つて來て、絶景かな絶景かなと反身になつて見得を切る、がアノ大地震にチヤブ臺を前にお箸と茶碗を手にしながら、茶店ごと諸(もろ)にセリ下つてゆくなど、けだし珍なるものであつたに相違がない。

二十、伊豆はどうなる

湯の村ゆ湯の村にくれて走り湯の
湯の國伊豆にいく日へにけむ

今日はたれも知るなる走湯の伊豆山權現にお參りする、人皇五代孝昭天皇のときの御造營仁德天皇の勅願所、役小角の終身奉仕せるところ、嵯峨天皇の勅使として弘法大師の參向など、恐ろしく由緒が古く長々しいものがある上に、賴朝は流人のときも天下を取つてからも、關東の總鎭守として尊崇もあり、實朝に至りては二所權現の參拜は前後たしか七八回におよんでる、かの箱根路を山傳ひに、十國峠の手前からおりてくる、伊豆の海の小島に浪のよる見ゆとある小島は例の初島である。

神佛混合で寺領二萬石を越え九十坊を算したといふ、曆應二年參河守高師冬が御造營の立願文に

幕府の雄兵安全にして常州の梟徒敗亡するときは

とある、常州の梟徒とは多分關城に立こもつた北畠親房なんど、南朝の面々を指してゐるのだらうが、常州の梟徒は振つてる。

その師冬の寄進になつた大がらんはあとかたもなくなつて、今は僅に神殿と拜殿とをのこすに止まる、五重の塔は維新の際賣り食ひの代に持ちだしたらしいが、川奈の沖で難破したといふ。

今日は大島は見えず、初島が半ば霞んでる、伊豆山の左近といふ男と初島の右近といふ女が、火をあげ合圖をしては三里の海をのり切つて相引をしたといふ、その左近はこの伊豆山神社で、右近といふは初島の初木神社の神さんだといふ傳說が殘つてる、昔は水泳の達人高石君やカナハモクのやうな人は澤山あつたと見える。

今日はゴルフリンク候補地選定と號し、口先許り玄人さうな態度をとつてる筆者は

三島峠に案内される。伊豆の海を見下してゆくながめも絶景だが、峠の切通しを抜けて富士の神山を前に、江ノ浦靜浦一帶の山河を見はるかす風光は得もいはれぬ、いつ見ても富士は好い、こゝに伊豆路からのながめがよい。

こゝでいよ〳〵伊豆の旅を終る。もしこれが歐米の天地であつたなら、富士の山麓を一週し少くとも一線は分れて長尾峠より箱根に通じ、更に三島に下り、沼津、三津長岡、修善寺、韮山の環狀線から、天城越の下田線、熱海より三島、伊東の二線の外箱根、十國峠間の尾根傳ひの線などは、自動車を驅り電車を走らしむべき眼貫の線として出來上つて居るであらう。沼津から戸田、土肥、仁科、松崎を經て石室崎を中心に下田まで、更に白濱、河津、伊東、熱海まで、觀光專門の船は横付になつたさん橋から奏樂のうちに動き出す、甲板の上に食堂もあるバアーもある、樂の音を耳にしながら逐ひくるかもめの群に餌を投やりながら、船は長汀曲浦をぬうてゆく、陸上のトンネルで煙にむれるよりも海上のデッキの上の方がどんなに氣が利いてるかも分らない、さぞや伊豆海岸めぐりの船はお客の目白押で賑はふ事であらう。

恐らくこの海岸めぐりや初島見物ぐらゐでは滿足出來ぬ、役小角や八郎爲朝で知られた大島、英一蝶、竹内式部の流された三宅島、浮田秀家の流された八丈島など、伊豆の島々が南にはしつてる、七島めぐり八丈行、更に小笠原島行の觀光船も出來て居るだらう。

マア船が嫌ひの海國男兒、海を恐るゝ大和民族に、コンナ事いふても今更野暮かも知れぬが、しかし存外夢のやうな事も實現されぬと限らない、德川鎖國前の日本人は八幡船で海上を家として、南洋三界まで發展したのだから。

× × ×

終りに沿道の有志各位に一行に代り厚く感謝の意を表しまする。

和田英作畫伯の鈴木文史樓戯畫像に題す

文史樓なれのおもは赤く丸し
林檎に似たりかぢりて見たし

小引

十和田より男鹿へ　大利根の水
北九州の旅　みちのおく
臺仙、花卷、盛岡

の五篇三十八章は、大正十五年九月富士精進湖畔の旅に引つゞき十一月へかけての紀行文で、朝日新聞社の下半期の決算次で總會、次で次期の豫算會議、さては大阪及東京に於ける通信會議、臨時に大阪朝日會館の落成式、次で各種の展覽講演の催があり、そのひま〳〵を縫ふて追つかけ引つかけ駈けめぐつた旅日記である。

到る處講演會歡迎會なんぞの催があり、かて、年末及び新年號に豫約した原稿、それも打明けていへば、この四番茶の上梓とありて、過去約一年間に亙る作品中より紀行文がかつたものだけをまとめたく、そのため始めて馬に乘つた話とか、近江兄弟物

語、ガラリヤ丸とか、人間こうなぎの話だとか、關西及關東の桃山譚だとか、いまだ筆に上さなかつた旅の思ひ出をあはただしくも起稿することになる。殊に年内に公にせねばならぬといふので、忙中無理矢理に稿をまとめあげた財政讀本の二校三校をせねばならぬ。これも自分は初校だけにして二校以下は他人に賴めばよかつたが、議會期節を前にして日々新聞雜誌に現はれて來る新規材料をあとから〳〵はめ込みたく、心忙しい旅中に原本もなしに、追つかけ〳〵校正の筆をはしらす。爲めに讀本に誤謬が少くなかつた事は今更言譯にもならないが、この機會に一言お詫をさして貰ひたい

その慌たゞしき旅の中に其行先々の朝日の地方版に、何か紀行文をといふのでガタガタと落ちつかぬ旅室の片隅で、ゴト〳〵とゆれの多い地方の汽車の中で、卽席早染をした筆のすさびが氏五篇である。本著の中へは遠慮して差加へてゐたが、頁數が足りないといふので、樂屋花の嫌ひあり文辭も甚だ蕪雜を極めてゐるが、新聞生活の一面をしのぶよすがにもと、そのままここに載せる事にした。

十和田湖より男鹿へ

一、つたの細道

九月の十五日未明の四時といふに精進の湖畔をあとに、自動車を樹海に飛して、紫に朱を刷けたらん如き富士の朝明けを仰いだのはわづか二日前であつた。

下界はあつい、今年の暑さは又別だ、富士高原の秋風に肌寒を覺えた身には、東京の暑さは又格別だ。その東京をあとに陸奥の國十和田湖畔の朝日會に臨むべく、夜の十時半といふに上野驛を立つ、同行は石井睡蓮。今更考へて見なくとも便利の世の中に生れたものだ。

朝の食堂車に入る、汽車は今一昨年の春總選擧のときに、忘れられぬ思ひ出をのこ

したる一の關驛をあとにした、中尊寺のむら立てる杉生が淺霧の中に朝日ににほふてゐる。

午をすぐる二時半古間木に下車する、世界公園館の小笠原八十美君と本多支配人横山社員に迎へられて自動車を驅り、一里許り長々と帶のやうにのびた三本木にいる。

少憩の後奥入瀨の溪流に沿うてのぼる、登るというても坂らしい坂もない、燒山より法奥澤の村長小笠原耕一君の案内で支流蔦川に沿ひ蔦の溫泉にそれる。一體蔦の溫泉などといふ名は夢にも知らなかつたが、大町桂月この地に逝きてより一時に蔦溫泉の名が廣まつた。假令車馬を通ぜざる山路とはいへ、山の奥のたゞの一軒家であるとはいへ、十和田湖途上より僅一里半の枝道と聞いては、つい煙霞の癖がでて寄り道をすることになる。

蔦川を渡りて密生林に入ると暮雲低く垂れて涼氣肌にせまつてくる、寒い。

蔦の宿屋から提燈さげて迎ひの若い男が見える、九日の夕月をならやぶなの青葉の樹の間に仰ぎながら、つたの細道を登つてゆく。

ところ〴〵立て札がある、提燈の火にてらして見ると、桂月の筆になる都々逸や歌などが記されてる。蔦の一つ家につくと存外家が立派だ、調度も整ふてる。何よりも浴場が氣に入つた、浴槽は馬鹿に大きい、天井も高い、流れ落ちる筧の水を耳にして湯に浸つてると、山の端にかゝれる月が青白い光をなげてゐる、桂月の

沼に船浮け姫ます釣つて
風呂で月見る山の中

と歌つてるのがこれだ。

湯をいでゝ食膳につく、久し振りの洋燈がうれしい、食膳の上にはヤマメの煑たのに、きくらげの酢のもの、わらびのお汁、きのこの煑つけ、山ぶだうとか何んとか高山植物とか、すべてが地のもの許りである。近頃は山の奥でも、やれ茶わんむし、マ

グロの刺身、口取り、トンカツ、フライなどで、おごかされ勝ちである世の中にさりてはうれしい。

山の奥の一つ家、洋燈と圍爐裏、山の地のものばかりの食膳、そこに桂月の長々しき山ごもりに左もこそこうなづかれるふしがある。

夕月は山の端にいでておし照れり
　　筧の水のさや〳〵と鳴る　　海南

やまめわらび山ぶだうなど膳にのせ
　　われを待つらん人もあれかし　　睡蓮

二、大町桂月の墓

人間といふものは妙なもので、睡眠術で評判をとつて睡蓮の號まで故北白川宮殿下

から賜はつた、天下御免のねむりや石井睡蓮はもとよりかくいふ海南まで、あす早起で蔦沼を見物して、八時までは燒山へゆかねばならぬとなると、五時前にいひあはしたやうに眼が覺めて浴槽にでかける、二階の横山、本多の面々も起きて來てる、ここにかく眠つてるのと死んでるのとはちがふ、息も通うてゐれば、寢てゐてもどこかに神經も通うてるらしい。

ひゞ麻や紫陽花の生茂れる森の小道を二町あまりして蔦沼にでる、朝日は繁み生へる向つ山の端を照しそめたが、水の面はまだほの暗く森の女神の懷ろに靜かに眠つてゐる。そのしゞまの中を野がひの牛が三匹、四匹、五匹、白樺の樹の間を縫うて湖畔にノソ〳〵と出てくるのが見える。

山の湖はいまだ暗けれどむかつ山
　　尾の上ひとこころ明るみにけり

沼添の白樺の森をゆく牛は
野飼なるらし見えかくれすも　海南

菱田春草の畫にあるやうな秋の森、こちの實のちらばれる木こり路を登りゆくこ、鏡沼月沼長沼なごがつゞいて、秋の水はさやけき音を立てゝ樹の間をくゞつてゆく

山の秋の水はさやけしこちの實の
みな底ふかく沈めるが見ゆ　海南

鬼甲こ名はいかついが紫の蝶の花をつけたおにかぶこ、この草の汁が、アイヌの矢の根につけられて熊をたふすこいふが、花の姿花の色はいかにもしほらしい、一枝折つて桂月の墓にさゝげる、君が大學をでゝ間もなく職に就いた、古い〳〵島根縣簸川中學よりの獻燈が墓前に建てられてあるのも懷しい。

蔦から燒山へもこ來し山を下る、この道を自動車道にしたいこいふ、溫泉を木管で燒山まで引つ張つてきたいこいふ、ごれもよからう實現されるのもサウ遠い事でもあるまい。

（九・一六）

三、岩手の朝日會

燒山から奥入瀨のけい流に沿ふ林道は十和田湖こ相まちてまれに見る絶景である、又見る人によりては十和田湖の方は支笏湖なり中禪寺湖なり多少の類例を他に求め得べきも、奥入瀨の溪流に至りては本多靜六博士をまたずこも、實際その類例を他に求めがたないといふ。

北部版に奥入瀨や十和田の景勝を說くはいはゆる釋迦に說法である、やめる。

十六日は朝日デーで馬鹿に天氣が好い。十和田湖上では天下丸に泰平丸にストトン丸それへ一行四十餘名が滿載せられて子の口を出る、この間北海道がへりに遠藤青森

縣知事の案内で石井睡蓮の一行が淺虫に遊んだとき、アノ灣内で眞青になつたり、ヘドを吐いた特志家が居る、ソノの特志家連が云はゞ吐かんと身構へてゐるが、ごうしても吐けない、周回十六里六千町歩の湖上波靜かに鏡の如く疊の如く、東湖から御倉半島の突角に沿ひ、中湖から中山半島をめぐり、西湖の岸につくまで萬古の處女林におほはれたる景勝をめでつゝ無事に世界公園館に引あげる。

朝日會は川村誠三君が會長席につく、うしろには守田寶丹のやうな字で次第書が張りつけてある、阿部理想閣主人の名筆だといふ、會議がはじまる、佐藤虎雄君の讀者勸誘苦心談が來賓の感激をわかす、來賓は筆者から石井、關口、伊東、木村、刀禰館の面々とつゞく。青森からは成田朝日會長山形からは阿部朝日會長が參加する、小原嘉左衞門君の閉會の辭があつて、あとは浴衣がけといひたいが、浴衣がけごてらがけとチヤンポンになつて宴會となる。

湖はしづかにさゞ波を立てゝる、十日の月は發荷峠の上にかゝつてる、中山半島の森の上には北斗七星がキラ〳〵とまたゝいてる、ごうやらあすもお天氣らしい。

（九月十六日）

四、和井内のます

傳書鳩がチヤンと元の古巣にかへるのだから、紅鱒がもとのお宿に戻つてくるに不思議がない、といつて仕舞へばそれまでゝあるが、三年といふ相當長い年月を經てから元の古巣へ歸つてくるのだから、感心しても少しも差支がない。

和井内のふ化場では約一町ばかりの間隔を置いて、二筋の山清水が湖面に流れ落ちるが、鱒はチヤンと自分の古巣の水の流れにあつまるといふ。人間は半歳遇はねばこの始末といふ、一年も立てば路傍の人となる、豈慨嘆せずんばあるべからずである。

ウンと腹へ卵をつめ込んだ鱒は三年目に古巣へ群をなして戻つてくる。その卵子をとつてふ化する數が一年に七百萬尾、その約半數が再び湖上に放たれ、殘る半數は全

國の湖沼に賣り出される、又盛んならずやであるが、それには秋田縣毛馬内町から明治十七年のその昔、この湖上にでかけて來て卅有餘年、鯉、鱒の養殖に長い長い慘たる苦心を重ねた、先代和井内貞行氏の功勞を忘れてはならぬ、十和田の自然の風光が天下の絶景と稱せられてるが、そこには人間の血と汗ににじみ出されたかうした話のある事も覺えておいて貰ひたい。

和井内ではホテルを兼營してる、世界公園館と西湖を中に東西相面して、風光の眺めも自ら趣を異にし中山御倉の半島が指顧の内に霞んで見える。（九、一七）

五、十和田吟

明治大正の俳壇を三分してその一にをつた秋田の「俳星」は、石井露月を中心として安藤和風島田五空等、子規直系の先進が積年の努力にまつたものであつたが不幸廢刊となつてゐたるところ、今回再現を見るに至りしは、ひとり北日本俳壇の一大福音たるに止まらない。

なごとコンナ所へ何んで突拍子もなく書きだしたかといへば、その島田五空翁が秋田朝日會の代表として、今日は山形秋田聯合の朝日會に水際立つた鮮かな座長振りを發揮して居たからである。

五十名に近い主客が、熱心に論議する、打ちくつろいで興ずる、一々書きつけて見たところで樂屋落ちになるから、マア伊藤通信部長や刀禰館販賣部長の熱誠振りにお手盛りの賛辭を呈し、鶴岡、花輪、小坂等の會員諸君の眞劍振りに敬意を表して、あとは五空翁の十和田吟にゆづるをもつて賢明なりとする。

夕景より密雲深くたれて正に晴好雨奇。

十和田湖雜吟　　島田五空

岩鼻に一樹は早き紅葉かな
見上るや秋白々と岩のはだ

新涼や樹の影ひたす波の色
湖めぐり山低かれど秋の雲
秋風の岩たゝみ來て水に險し
秋風の何を命や岩の松
山ひだの深くや秋を潜めけむ
舟ゆくや秋風早き水の上
しろ〳〵と花もつ草や岩のくま
湖を見つ舟を返せば萩の雨
雨も好しと樓を離れず湖の秋
雨の中に明けゆく湖や山の影

六、秋の山と水

すでに島田五空翁の俳句を紹介した以上は、我々同人の短歌も披露しないと釣合がこれないぢやないか、ともなんともいふ人はないが、この一行に刀禰館フォード大人が居る。

この大人は短歌の大量生産においては他人の追隨を許さない、自から一萬首期成獨盟會長となり、咳唾玉とまではいかぬが土にもならぬ、石位にはなる、平均五分間一首位の超高速度をもつて、尻から〳〵歌をでつちあげ高らかにこそは讀みあげる。同人少からずあてられてゐたが、いつのまにか次第に傳染し、こうだう發荷峠を越えて秋田縣大湯の客舍にはいると、短歌の披講がはじまり、互に御座なりの贊辭を交換せるもの次の如し、右報告に及び候也。

りんご畑夕ざりにつゝりんごの實
群なる枝にうす光りをれり　素空

大湯路の田の面にみのるひえの穂に
赤きあきつの群がり飛べり

鈍色の湖を透かせて山峡の
桂の大樹雨にけむれり　　默堂

みづうみにうつる白雲山を低み
秋の大空にいちじるく見ゆ

深山路にふと拾ひたるこちの實に
心かすめし思ひ出のあり

秋風に峰の雲吹き森をふき
うみづら吹きてわが袖に入る　　睡蓮

向ひ路の山をつゝみし雨雲の
雲脚のびてはや時雨たり　　眞砂緒

山かひのこちの木にからむ蔦かづら
はや色づきて秋は來にけり

山の湖はたゞにしづけし湖添ひに
あひる見えたれごいつか居ずけり　　海南

夕燒の雲ひろごりて湖の面を
あかく染めしがやゝに消ゆくも

夕燒のむら雲くづれ山の湖
船一つ見えてたそがれにけり

山の湖はねむりしづかに一つ星
山の端低うまたゝけり見ゆ

陸奥の十和田の山は秋早み
山葡萄の葉の見るに色こし

秋雨けむる中を發荷峠をのぼる、十八町の山路丁度散策氣分に持つて來いである、かへり見すればこち、いたや、桂なんごの樹の間から十和田の湖が霞んで見える。峠から自動車で大湯に下る、千葉旅館でひるめし。（九、一九大ワニにて）

七、小坂の古き友

同じ時同じ所でも虫の居ごころで氣が浮いたり沈んだり、笑つたり泣いたりする、況んや時と所を異にするにおいてやである。

今小坂の鑛山を主宰してゐる日吉平吉君は、筆者と入念に親しい間柄である、小坂から十和田へ使をよこしてくれたが、ごうも日割の都合で小坂へは出かけられぬ、あす大館能代で僕が講演をする間に舊友石井君が代つて出かける事にしたが、大湯に來て見ると東京から電報がきて、石井君は今夜歸京の途につかねばならぬ事になり、二人とも小坂へゆけなくなつた。しかし遇ひたい、電話をかけると日吉君大館へ出かけて待つからといふ。

我々一行が毛馬内から秋田鐵道へ大館に出ると、丁度小坂鐵道で日吉君が見える、本線の汽車のでるまで、プラットホームで話しがタツタ四五分間、何か急用でもあるのか、相談事でもあるのかと云へば何んにもない、たゞ顏を見たいのだ、ごちらも馬並に長い顏だ、その無事な長い顏を見たり見せたりすればそれで宜いのだ、唯手を握つて達者かネ、達者だよ、それだけである、それでいゝ、それでいゝ。

僕が日露戰役前ベルギーに留學してお土産に持つて歸つて來たのが、振替貯金と簡

易生命保險と年金の三者であつた。振替は日露戰役中スラ〳〵と成立したが、簡易保險と來ては各保險會社の反對運動に對抗して隨分長い間惡戰苦鬪した、その長い間の女房役が實に日吉君であつた。僕は臺灣へゆく日吉君は藤田組へゆく、今度は僕が大阪朝日の人となる、大阪では遇ひたければ毎日遇へる、藤田組と大阪朝日とは眼と鼻の間にある、しかしいつも遇へるとなるとさて存外遇はない、減多に遇はない、又遇はうとも思はない、その日吉君が小坂の鑛山へ乘込んだと聞いて、ごうかといへば君は蒲柳の質である、なんとなく案じられる、今秋田の奥まで出かけて見ると、何となく遇はずには歸られぬやうな氣がする。

時と所である、大阪のクラブや旗亭で何時間となく膝を交へてゐるよりも、北秋田のステーションで僅四五分間手を握つて唯ヤー〳〵といふ、それでいゝ、それでいゝ。

（九、二〇能代にて）

八、大鰐から大館能代

大鰐につく、古くより溫泉場で名を賣つてる上に、近頃は又スキーの名所となつて、十四五年前の旅の思ひ出から見ると大變なかはり方だ。

ステーションに六尺ゆたかな容貌魁偉な男が先頭に立つて頭を下げてる、一寸國粹會支部長といつた格である。加賀旅館につくと又その先生が控へてる、國粹會支部長實は旅館加賀助の主人で、姓は工藤名は加賀助、その祖加州富樫家の家士工藤勘助この地を開拓したといふので、中々由緒深い家柄だといふ、敬意を表する事にする。

東北通信部大會とあつて二十餘名の社員が待ち草臥れてゐる、溪流に臨んだ加賀助の二階の大廣間で、直に開會議事にとりかゝる、何分にも伊東部長が熱心だからやり切れぬ、夜九時に入りて漸く閉會、それから入湯夕餐。

近く公にする財政讀本中に、模範組合として紹介してある林檎の本場竹館村は隣村

になつてる。サク〳〵こ齒當りのよいりんご、味がいかにも旨い、默堂歌あり。

陸奥の街をいゆけば林ごの實
店にならべり秋立つらしも

さく〳〵こ林ごをかめば初秋の
すが〳〵しさよ旅のあしたは

この夜から一行四分五裂して翌日午後筆者こ關口默堂今村中村等同行四名大館に下車する、泉町長武石讀者會長等に迎へられて講演會に臨む、默堂の演題が實驗された普通選擧こあつたが、能代の演題怪文書流行の原因こいふ方に願ひたいこいふ、コンナお好みの出る事がそも〳〵困つたことだこいひながら、お好みこあつて演題を怪文書の方にこりかへる。

筆者にも注文が出た、それは昨夜こゝで同じ主催者連で簡易保險と年金の活動寫眞撮影を企てたが、機械に故障があつて全然失敗におよんだ、先生は御關係が深いから「我國教育の側面觀」につきお話の中で、ごうか簡易保險こ年金のお話も願ひたいこいふ、この間全國遞信關係の人々が東京へ集まつた時も、出かけて一席話した事がある、お易い事だが時間が足らぬ、極大要だけ講演の中へ刺身のつまにする。

雷雨しきりに至りていつ止むべしこも見えぬ、汽車辨當で腹をこしらへて能代に着いたのが夕の六時、すぐ講演場に入る、この雨中に聽衆五百人を越えてゐる、島田五空君の開會の辭から默堂の怪文書、引つゞき僕の普選の運用につき辯じたてる。かへりは雨止んであすの男鹿行もこれならばと喜んで居たが、夜來雷雨又しきりに至り、ガラス戸越しにピカ〳〵光るのが幕をへだてゝ見える、ゴロ〳〵はためく音を耳にしながらこの夜はじめて蚊帳の中で横になる。

今日は子規忌だ。

九、男鹿にゆかざるの記

標題では十和田から男鹿へと書いて置いたその男鹿へは行けない、秋雨降りしきるばかりか風が強い、船川からこても船はだせませぬと電話がかゝつて來た。男鹿半島は賴三樹が

男子一搜男鹿島
松洲始覺屬妖嫂

と歌ひ松島などの女性的なるに比して豪宕快濶男性美を發揮してるといふ、志賀矧川翁は秋田の男鹿に匹敵し得るもの唯ハワイの外海府の海岸である、否ずつと飛びぬけて世界の男鹿だ、日本の三景なんぞ一緒くたにして逆立ちしても及ばないとまで激賞してる。賴三樹は松島が評判ばかりで存外女性的だといふたは、アノ氣性にソリが遇

は無かつたと見えて、羽越の國境笹川流れの景を推して、矢張り松島の比にあらずと稱してる。しかし筆者の見たところではさうまで笹川流れが好いとも思はれぬ、その笹川流れの方が又男鹿より好いといふ人もある、見る人さまゞである。矧川翁の話は秋田で土地の新聞記者に話したのだから多少の懸直もあらう、しかし半分に割引しても大變なものである。

秋田から北に向へば琵琶湖と霞ケ浦に次ぐ日本第三の湖八郎潟がある。その外角男鹿の半島は寒風山、本山、眞山の三山を擁し、船川灣から戸賀に至る海岸一帶は奇岩怪石、北海の怒濤洶湧するところ、神工鬼斧の妙を極めてるといふことである。

一體十和田湖の主であつた八郎太郎が、綾小路關白是眞卿の孫だといひ傳へられてる南祖坊と七日七夜龍虎の爭ひをつゞけ、とうだう敗北してこの八郎潟に落ちてきたのだといふ、これへ田澤といふ女性の湖がはさまつて、湖沼の傳說すこぶる豐富であるさうだが、いづれも社友柳田國男君の繩張りであつて、我々素人ではうつかりした

事は書けない、たゞ八郎太郎のあとを逐ふて八郎潟から男鹿の勝を探らうと思ふたのが全く失敗に終つて殘懷至極である。あすは秋田で講演のあと午後に東京へ立たねばラヂオの放送や蹴球の委員會に間にあはぬ、日延べもなんにも出來ない。

雨はまだ降りしきつてる、イマ〳〵しいナアと、ペンを手にしてガラス戸越しに空をにらんでると、名物キリタンポの仕度が出來たと隣の部屋から今村が雄鹿式の顏をヌーと出す。

キリタンポとは新米をつきあげて竹輪形にしてある、これに葱、油揚、ごぼう、きのこ、鳥肉など取り交ぜ、各々一つづつ小さい七輪を前にして小鍋立てをする、一寸乙なものである。匂がぷん〳〵する、煮立つて來たかグツ〳〵と音がする。男鹿にゆかざるの記もこゝで打ち切り、ペンを捨てて箸をとる。（九、二〇）

十、秋田禮讃

九月二十一日……この日は午後三時半の急行で歸京の途につく事になつてゐる、ところが講演を師範、中學、高女の三ヶ所でやつてくれといふ。

午前と午後と一回づゝとしなければ一寸時間の割振がつかぬ、いかにオシヤベリを苦にせぬからといふて、これが政戰といふではなし、晝めしをぬきにまでせねばならぬ事はない。といふて掛け持ちで時間ギリ〳〵にシヤベリまはつて停車場に駈けつけるなごと、ソウ氣忙しくてはオチ〳〵シヤベレない、そこで高女を午前にし午後の師範と中學を一緒にする事になる、一體秋田にそんな大きな場所があるのか、雨天體操場かなごといふなかれ、ウントでかい立派な記念館は公園の中腹に建つてゐる。花のお江戸の眞ん中にはまだ公會堂らしいものがない、日本といふ國は何でも外國の事とさへいへば眞似をしたがる、そこで東京でもソレ公園、ソレ博物館、ソレ圖書館、ソレ動物園、植物園と、近頃ではトラック、グラウンド、プールなどとスポーツの設備まで眞似をしだした、アンマリ眞似許りするのはシヤクだから、セメテ一つ位は眞似せず

に置かうといふ心意氣かも知らない、兎に角公會堂だけまだ遠慮して建つてない、否實はやう〳〵の事で建築にとりかゝつたが、何かとモメル事が年中行事になつてる東京市だ、日比谷公園の片隅で工事中止となつて中ブラになつてる。これが大正十五年秋の今の事である、あにそれ遲からずとせんやである。

それが秋田ではデカイ土地不相應に立派な公會堂が建つてる、それも昨日や今日の事ではない、今を去る事約二十年近くも前の事である。筆者は明治四十二年頃であつたか、時の知事森正隆君と會飲した事を覺えてる、その時分この公會堂で貯金局長として講演した事がある。

その後不幸火を失し今その殘墟に相隣して又新に建てられてある、その公會堂で柳田國男、吉野作造二君と共に長廣舌を揮ふたのが、大正十三年の春衆議院の總選擧を前に、憲政を常道を進むべく政戰の旅百日に及ばんとした頃であつた。

今日は高等女學校の講堂に關口默堂は國際聯盟について、筆者は默堂の話を援用して、テナント夫人とその子を中心に、母として姉としての日本の婦人につき辯じる。終りて秋田城跡に午餐をしたゝめ、更にこの新公會堂に師範と中學兩校の生徒を前にして、默堂は國際心の涵養に、筆者は新聞の見方につき壇上に立つ。

後三時半西居中學、長澤高女、和田師範の各校長、臺灣の舊友上田事務官等に見送られて東上の途につく。

蔦の山の湯に浸りてかけひの音に耳を洗ひ、十和田湖畔にスキスのレマンの湖をしのび、大鰐、大館にりんごの香を懷しみ、能代の客旅にキリタンポを箸にし、三たびこの秋田公會堂の壇上に立つたのも、今更に忘れがたない思ひ出である、あすはイヤが應でも朴烈とか何んとかいふ寫眞事件などで、市が榮えてるアノ東京といふところへ着くのだ。

湯澤の町をあとに食堂車に入れば、窓外暮雲低く垂れて垂穗の稻田は秋雨に煙つてる。旅愁がわく、東京へかへるのがいやだといふ旅愁がわく。

北九州の旅

一、美術館と朝日會館

關門海峽から折尾へかけては水も陸も眼に見ゆるもの皆黑い。

石炭の壽命はもう八十年しかないといふ、倍にしても百六十年だ、いづれにしてもさう長い事はない、然しこの石炭に惠まれたる福岡縣は、日本の寶庫として東洋工業動力の中心を形つくつてる、濛々と立ちのぼる黑焰見るからに心强い、その石炭を生命としてる若松市から、佐藤慶太郎君は東京の眞ん中へ美術館を生み出した、石炭から美術館面黑いぢやないか。

世界第一等國といふ日本帝國は、西曆一千九百二十六年に至り始めてたつた一つの美術館を見ることゝなつた位だから、上野のバラックで開催された院展や二科會が、大阪で横堀の商品陳列館を借用してたのは大出來の方かも知れない、それがこの秋から新築の朝日會館の展覽會場に陳列することゝなる、不十分ながらまあ一進境を見たといふものである。

朝日會館の竣工はづる〳〵延びて、ぎり〳〵の院展に間に合はすため、この九日に開館式を擧ぐることゝなつたが、それまでに日割がぐらつくためいろ〳〵と手違ひが起つた。十月は簡易生命保險の創立第十週年記念とあつて、緣故の深い筆者は全國各地の記念講演に交渉があつたが多くは立ち消えとなる。

福岡縣產業組合講習會の講演もこの夏からの約束であつたが、二度日割を變更することゝなつた、筆者にも可成り苦痛だつたが、大會主催の側から見れば定めし一方ならぬ迷惑であつたと思ふ。

今曉五時半關門を越えて足を九州の一角に入れる、枝光から江を隔てゝ若松の港が